

令和7年度第1回葉山町総合教育会議 会議録

- 1 開会年月日 令和7年7月16日(水)
- 2 開会場所 保育園・教育総合センター 会議室
- 3 出席委員 町長 山梨崇仁
教育長 稲垣一郎
教育長職務代理者 小峰みち子
委員 鈴木伸久
委員 下位勇一
委員 清水衣里
- 4 出席職員 教育部長 虫賀和弘
教育総務課長 武藤達矢
学校教育課長兼教育研究所長 大黒貴文
生涯学習課長兼図書館長 守谷悦輝
- 発表者 T e l a c o y a 旅する小学校
代表理事 中尾薫
C r e w 高橋理沙
ヒミツキチ森学園
理事 野瀬美千子
スクールリーダー 青山雄太
- 5 議長 町長 山梨崇仁
- 6 書記 教育部長 虫賀和弘
- 7 開会 午後2時00分
- 8 閉会 午後4時19分
- 9 協議事項 (1) 町内の多様な学びの場について
①「T e l a c o y a 旅する小学校」学校紹介
②「ヒミツキチ森学園」学園紹介
(2) その他

(開会宣言)

教育総務課長) それでは、定刻になりましたので、ただいまから令和7年度第1回葉山町総合教育会議を開会いたします。

時刻は14時です。

総合教育会議につきましては、地方教育行政の組織及び運営に関する法律第1条の4第1項の規定によって設置され、同条第3項の規定により、町長が招集するものとなっております。

また、本会議は、地方公共団体の長と教育委員会という対等な執行機関同士の協議及び調整の場という位置づけになっております。会議において調整がついた事項については、それぞれが尊重義務を負うものの、地方公共団体の長と教育委員会のそれぞれの執行権限の一部を会議に移し、この場で決定を行うものではないため、決定機関ではございません。また、地方公共団体の長の諮問に応じて審議を行う諮問機関でもないことを申し添えます。

ここで、本日の配付資料の確認を行いたいと思います。

会議次第、それから、資料1、支援教育資料、資料2、「Telacoya 旅する小学校」のご紹介資料、資料3として、「ヒミツキチ森学園」のご紹介資料、以上となります。

不足してありましたら、事務局までお申し出ください。よろしいでしょうか。

(町内の多様な学びの場について)

教育総務課長) それでは、会議次第に沿って進めさせていただきます。

協議事項に入っておりますが、本会では、葉山町総合教育会議設置要綱第4条の規定により、町長が招集し、その会務を総理することとなっておりますので、これ以降の進行を山梨町長にお願いしたいと存じます。

それでは、山梨町長、お願いいたします。

町 長) すみません。皆さん、こんにちは。改めまして、よろしくお願ひいたします。

それでは、初めに傍聴人の確認をさせていただきたいと思います。

本日、傍聴人の人数は。

教育総務課長) 傍聴人はございません。

町 長) いらっしゃらない。承知いたしました。

それでは、協議事項に入りたいと思います。

協議事項の(1)学校再整備に係る取組状況についてでございます。

では、教育総務課長より説明をお願いいたします。

本当だ、令和6年だ。全然違う話でした。学校再整備の話だと思っていました。すみません。失礼しました。

協議事項(1)町内の多様な学びの場についてとなります。協議事項について、よろしいでしょうか。

委員全員) はい。

町 長) それでは、協議事項(1)町内の多様な学びの場についてとなります。資料がございますので、説明は教育総務課長からでいいですね。

教育総務課長) 本日の協議事項(1)の議題につきましては、学校教育課長からご説明をお願いします。

町 長) 失礼しました。事務局より説明で、学校教育課長ですか。お願いいたします。

学校教育課長) よろしくお願いいたします。

初めに、私のほうから、本日、町内の多様な学びの場についてを議題とした背景について、少しお話をさせていただきます。内容の一部は、今年1月に開催された総合教育会議でも触れておりますが、改めて葉山町における支援教育の現状について、ご説明いたします。

こちらのグラフをご覧ください。これは、葉山町における特別支援学級に在籍する児童生徒数の推移です。平成27年には64人だった支援級在籍者数は、令和7年5月1日時点で165人となっており、10年間で2倍以上に増加しています。また、不登校児童生徒の数も大きく増加しています。平成27年は19人でしたが、令和6年度末の時点では115人となり、約6倍に増加しています。

このように、特別支援学級に在籍する児童生徒や不登校の児童生徒の支援の在り方については、町の支援教育における重要な課題であると受け止めております。この課題に対して、教育ビジョンに掲げた六つの方針のうちの一つ、「もっと、一人ひとりの学びを」では、7年後、すなわち2032年の葉山町の姿として、学びの場につながっていない児童生徒数をゼロにすることを目標に掲げ、現在、様々な取組を進めています。

その取組の一つとして、令和4年から葉山町支援教育推進会議を開催しています。この会議では、インクルーシブ教育の理念の構築による共生社会の実現を目指し、この三つの方針を軸に協議を進めております。会議には、校長や特別支援学級教員の代表に加え、ことば・きこえの教員、教育支援教室「ヤシの実」の教員、大学教授、国立特別支援教育総合研究所主任研究員、神奈川県教育委員会指導主事など、多様な立場の方々にご参加いただき、具体的な取組や町の支援教育推進指針の改訂に向けた検討を重ねているところです。また、先ほどのビジョン、学びの場につながっていない児童生徒数をゼロにするための実現のために、子どもたちが自分に合った学びを選べるよう、多様な学びの場を学びのグラデーションとして捉え、その充実に取り組んでいます。

まず、校内の学びの場として、昨年度から町内6校全てに校内教育支援センターを設置しました。この画面では、リソースルームという名前になっているところになります。これは、教室での学びが難しい児童生徒が安心して学べる場として設けたものです。さらに、校外の学びの場としては、現在、ことば・きこえの教室やヤシの実などがあり、今後は、町内及び近隣のオルタナティブスクールやフリースクールとも連携を深め、学びの選択肢のさらなる充実に図っていきたいと考えております。本日の会議も、そのような多様な学びの場との連携をさらに深める貴重な機会と捉えております。

この後、町内のオルタナティブスクール2校の皆様から、日頃の活動や考えについてお話を伺えればと思っております。

事務局からの説明は以上です。どうぞよろしく願いいたします。

町 長) ありがとうございます。

それでは、このまま意見交換に移ってよろしいですか。

教育総務課長) では、先に、T e l a c o y a 旅する小学校さんから事業のご紹介いただければと思います。

町 長) すみません。自己紹介からお願いしてよろしいですか。

中 尾 氏) 遅れまして、申し訳ございません。一般社団法人T e l a c o y a 921 の代表の中尾と申します。よろしく願いいたします。

高 橋 氏) T e l a c o y a 旅する小学校のスタッフの高橋と申します。よろしく願いします。

野 瀬 氏) ヒミツキチ森学園から参りました理事の野瀬美千子と申します。よろしく願いします。

青 山 氏) ヒミツキチ森学園のスクールリーダーをしています青山雄太でございます。よろしく願いします。

町 長) それでは、今日は資料を頂いておりますので、T e l a c o y a さんの旅する小学校さんからご紹介をお願いいたします。

中 尾 氏) では、よろしく願いいたします。

私たちの学校のコンセプトとしましては、この葉山町の立地を生かして、「海から学ぶ 日本という島のこと 暮らしのこと 経済のこと 世界のこと」ということをコンセプトに学校を運営しております。

子どもたちのはてなを集めていくような授業にしているので、計画的にということもなかなか難しく、ある程度の計画性は持ってはやっているんですけども、子どもたちが、道がこっちに行きそうになったときには、そっちを改めてまたスタッフで考えながらこっちの道をつくっていくみたいなやり方で、毎日を進めております。ただ、海というものを一番中心に使いつつ、葉山にある山、川も全部使わせていただきながら学びを進めています。

子どもたちに持たせてあげられるのは、自分がこの先生きていくためのコンパス、自分の人生のコンパスだけというぐらい振り切っています。なので、字が読める、読めないとかというよりは、自分で全て決められるかどうかということが一番大事にしているので、極端に言うと、授業に参加する、しないも自分で決めて、しないなら理由をちゃんと言って、その理由を私たち大人だけでなく、仲間にも納得してもらうことができたなら、自分でその時間をどう使うかということ自分で生み出してもらおうというようなやり方になっています。

子どもたちの様子についてです。

町 長) 中尾さん、お座りいただいて大丈夫ですよ。

中 尾 氏) すみません。失礼します。

毎日の給食は、自分たちで火をおこして、米を炊くところから自分たちでやっています。給食の食材費の予算が一応あるので、その中で計算をして、予算内で給食を自分たちで献立を組み立てて作るということをやっています。燃やすものの燃料とかの調達も自分たちで行って、足りなくなったらどうするのかとかも自分たちで考えて進めています。

あとは、基本的に、毎日はみんなで決めると自分で決めるのもう連続で、1日の中で何回も何回も何回も自分で決める、みんなで決めるが繰り返されているというような部分になっています。

学校には、常駐しているのは、スタッフが、大体、毎日4人が基本になっていますけれども、講師が、今、ちょっと正確な数字が、ごめんなさい。40名弱ぐらいの講師の方が関わってくれていて、毎月来る人とか、2か月に1回来る人とか、学期に1回来る人とか、年に1回来る人とか、いろんな人が関わってくれています。その皆さんが自分が好きなことをして大人になった人たちということなので、自分の好きなことを突き詰めた結果、こうなったという姿を見せてもらったりしています。

地元でいいますと、漁師の晶さんたちが毎月その日に取れたものを持ってきてくださって、さっきまでどう生きていたのかとか、この魚はどういうふう成長していくのかとか、あとは、どうやってさばいて食べるのがおいしいのかとかを、毎月1回、やっているとともに、海の中の様子というのを漁師さんから聞いて、海の中の変化について考える時間にしていただいたりしています。

地球まるごと教室というのは、もう本当に葉山にある海、川、山全てが学びのフィールドだと思っていますので、全てから学べることをどう広げていけるのか、大人が広げたいと思っても、子どもは深めたいものもあつたり、大人は深めたいと思っても、子どもは広がりたかつたりとかがあるので、都度都度、講師の先生と相談しながら進めているような形です。

子どもたちの様子の中で、毎日、決まったカリキュラムをこなそうと思っていなくても、あと、人数の受入れが少ない分、時間的にはゆとりがあるわけではないんですけども、自由に使えるという部分があるので、何か引っかかることがあると、途端に話合いということで、軽く2時間使うということもあります。その結果、子どもたちの名言が下に書いたんですけど、子どもたちが、友達というのは、好きなことや楽しいことを一緒にやって楽しい人のことで、仲間というのは楽しいことだけじゃなくて、苦しいことも嫌なことも一緒にやって、でも、同じ目的に向かう人だという話をしてくれました。それは仲よくなくてもできるんだということで、旅小の人たちはみんな仲間なんだと。だから、休み時間にけんかしても何しても、授業になって協力し合わなきゃいけない場面では、それは切り替えてやるべきだというのを、上級生たちが、今、下級生に教えてくれていますけど、下級生は何で仲よくなくてやれるのかということがはてなでしようがないというのがまだ現状です。

じゃあ、旅する小学校という名前の旅に行きますので、旅に行くための準備としても、いつも丸くなって話し合っ決めていくということがあって、旅に持っていくもの、旅先のガイドブックを作るところまで旅先を調べ込むということとか、そういうことをしてから旅に行っ、行っ帰っきたら、この旅で誰に感謝をしたいのかというところが、最終、着地になりながら、また次の旅先を探すというような形で進んでいます。

旅に出ると、もう24時間、何日間ずっ一緒なので、本当に子どもたちもぶつかりますし、本当に人としてどうしていくかというものが突きつけられる部分がありますので、そこから生まれる絆というものは、確かに仲間になっていくものなのかなと思って見えています。

学びについてですが、一つの事柄から他教科を学ぶというようなことを一応大事にしています。例えば、梅の実がなっているから取りに来ていいよと言っいただいて、梅の実について知ったりとか、梅の実を取っ何を作るかによって、考えたりとか、あと、梅干しを毎年作っているので、その塩分濃度を何%にするかを子どもたちが考え、それによって、塩の量を変えるということで計算をしたりとか、あとは、毎週金曜日にステップアップフライデーというテストではない、今週の出来事から、何だろう、埋めていく学びのシートみたいなものがあるんですけども、それには、例えば、梅という漢字を書いてみようとか、低学年だったら、梅っ片仮名で書けるかなとか、1年生だったら平仮名で「うめ」と書くとか、そういう形で、文字と数字を進めていくのとともに、ほかのいろいろな、学校でいったら、社会とか理科とか、家庭科とか、そういう分野にも広がっていくような取組方を常にしています。

学びの方法は、子どもがはてなというのを大人がなるべく見聞きして拾っ、それを全体で学ぶ、もしくは、大きい学年が学んで、大きい学年が小さい学年に今度は教える準備をする時間があっ、小さい学年に大きい学年が教えるという進み方と、子どものはてなを今度拾っ、調べたいもの別に、チームに分かれて、それを調べた結果をまたお互い発表し合っ、また新しいチームになって広がっていくみたいな形を繰り返すものと、大きく2方向かなという感じでやっています。

個人とチームの両立というところでは、個人もチームもどっちもやっぱり大事だと思っているので、うちは海を中心にやっいて、シーカヤックだと、一人で船長になって、自分がどうぐかとか、自分がどうするかっ自分で決めるんですけど、サバニという最初の写真にあっような帆がついている、みんなで協力しなきゃいけない乗り物に乗る場合は、仲間を進めなくちゃいけないというところで、折り合いを、一人だけがこげてもしょうがないしというところで折り合いをつける。

個人とチームというところていくと、旅に参加するかどうかも個人、だけど、海に入るかどうか個人、選択する場面は全部個人なんだけれども、決めて入ったと

ころは仲間なので、今度は、その決めた人同士の集まりの中でどうしていくかというところは、チームとして考えていくというところをやっています。

後で、ドキュメンタリー映画を今作っていただいているんですが、まだ大丈夫ですか。その中でも、その一人で 100 点取っても駄目だしというところで、みんなが 80 点を取ろうというのを目標にしていて、その 80 点取るために、ゼロ点という人は一人もいないはずで、1 点でも出せるし、20 点も出せるしというところで、チームというものの意識を、日々日々、みんなが、子どもたちも声に出して使っています。

いろいろ、地元の晶さんたちの取組と一緒に、安藤百福財団のトムソーヤコンテストというのに去年のチャレンジを応募しましたら、優秀賞をいただきまして、そこからいろいろ取材をしていただいたりとかが広がりました。

あとは、これも、サバニのプロジェクトを取り上げていただきました。

あと、エシカルアワードもいただきました。ありがとうございます。

未来は、実際は、ちょっと私たちも保護者の皆様から頂いている学費のみが収入源で、何の補助もなくやっていますので、1 人当たりの学費もとて高くなってしまっていますし、それが本意ではないんですが、私たちも運営していかなくては行けないので、その部分の工夫としては、短期留学制度というのを今考えています。見学に来る方も、やっぱり通いたくても遠方で引っ越してくるところまでは踏み切れないから通えないという方もいらっしゃいますし、引っ越してくる方もいらっしゃいますけれども、なかなかそこはハードルが高いところでもあるので、短い期間でもいいので、来ていただけるような方たちをこれから募っていったらなと思っています。

一つ、今度、京急さんと一緒に、私の運営している幼稚園のほうで短期留学制度というのを京急さんと一緒にやれるトライアルが 8 月に始まることになったので、それをやってみて、もし小学校のほうもということになれば、両方で短期留学を受け入れることで、葉山町のよさを知っていただきたいし、もうとにかく葉山町が自慢だと思っているので、この場だから言っているわけではなく、なので、そこをやっぱりここがいいと思って引っ越してきて、そして、いい教育もあって、選べる教育もあってというところで、住んでくれる人が増えるのがうれしいなと思っています。この取組はちょっと頑張っていて、運営も安定させたいなと思っています。

私は、子どもたちを信じ切ることには難しいと思っています。でも、信じた結果は必ず返してくれるという経験を 40 数年繰り返してきたので、やっぱり大人は子どもたちから学ぶことが実は多いなと思っています。まずは、いろいろあるけど、子どもを信じてみようというところから始めていきたいなとも思っています。

ちょっと、今、ドキュメンタリー映画がもうすぐできるんですけれども、PR 用の 1 分半のちょっと動画ができたので、もしよかったら見ていただけたらうれしい

です。

(動画視聴)

中尾氏) ありがとうございます。(拍手)

すみません。申し遅れましたが、私、先に幼稚園を始めておりまして、おうちえんTe l a c o y a 921 という認可外の幼稚園を 2011 年に始めていて、小学校を始めたのは 2021 年からです。なので、まだ小学校は 5 年目で、まだまだゆとりもなく、中もあっぷあっぷしていますけれども、やっと子どもたちが旅小らしさみたいなものをつくり上げてきたなど最近は実感しているので、今日も、子どもたちにどこへ行くのと言われたから、旅小の自慢してくるねと言って参りました。なので、いろいろ毎日ありますけれども、確かに葉山町の不登校になりかけているお子さんとか、支援級に行かれていた子とか、ほかの市町村からもそういうお子さんが来る場合もありますし、1 年生から全くそういう要素もなく選んできてくれる子もいるという、みんながミックスしている中で、そういうちょっと特性がある人たちが来ても、何かみんながいつもここで話しているのは、もう子どもたちの空気感で全部を溶かしてしまうような感じがあって、最初は大変ですけれども、そういう子どもたちも、子どもたちに溶かされていくので、大人ではなくて、なので、そこが子どもたちが変わっていきけるすごくいいところなんではないかなと思っています。

私たちは、公立小学校とかを一切否定したくないと思っているので、大きい学校、公立でしかできないことは絶対ありますし、あと、私たちみたいな小さいところからできることというのもあるので、これから学校がたくさんいろいろ増えて、子どもたちが選べるというような社会になるといいなと思って、そうなったら、不登校という言葉がなくなるんじゃないかなと私たちはずっと思っていて、不登校の子たちは、行ったり、行けなかったりを繰り返して、とうとう行けなくなっちゃった子が不登校で、定義も 30 日以上行っていない子となっていますけれども、たまに行けていても、すごい苦しい子もいるし、そこに新しい選択肢があることと、いろんなところで手がつなげることで、子どもたちを守っていきけるのではないかと考えております。

以上です。ありがとうございます。(拍手)

町長) どうもありがとうございました。

それでは、続きましてになりますので、このまま、では、よろしく申し上げます。ヒミツキチ森学園さん、よろしく申し上げます。

野瀬氏) 葉山のレジェンドの後で話すのはすごく。

聞き苦しいかと思いますが、聞いていただけたらと思います。

ヒミツキチ森学園です。ヒミツキチ森学園は、「自分のどまんなかで生きる力を育む」という非常に分かりづらいコンセプトを大切にしています。コンセプトを考えると、ちょうどコロナ禍に入ったこともあって、何が正解か分からないこの

世の中で、何が正しいのかを自分で選択しなきゃいけないところに立ち向かったときに、いろんな常識や概念がアップデートされていくのを感じていたんですけども、でも、昔から今でも変わらないものって何なんだろうというのを問うたときに、人の心はそんなに変わらないんじゃないかなというところに行き着きました。私たちの生き方も大きく変化し続ける中で、これからの子どもたちが今後の時代のつくり手としてなるとするのであれば、またさらに変革期がやってきて、それであったら、どんなに時代があっても変わらない、自分のど真ん中にあるものというのを、子どもも大人も日々問いながら、自分の人生の舵を自分で握るということを大切に生きていきたいということで、子どもたちも大人たちも、日々、このコンセプトを大事に毎日を過ごしています。

ヒミツキチ森学園のミッションって大きなことを言っているんですけども、私たちが小学校に値するオルタナティブスクールをつくりたいと思ったときに、いろんな場所を回りました。私も、子どもを産んだばかりだったので、神奈川県から出ることが難しく、神奈川県内という世界しかまだ見れていないんですが、そこでびびってきたのが葉山町でした。すごく自然が豊かであるということと、何より人が温かかったです。何もやったことのない私たちの話を真剣に聞いてくださったのは葉山町の方々に、それで、どうしてもここで開校したいということと、開校したことで、私たちも何か皆さんの力になりたいということで、今も日々行っています。

学園をただ開校することが私たちのゴールではなくて、それは一つの通過点として、私たちが総合的に目指したかったのは、その私たちの活動も含めて、これからの教育の未来にうねりが起こったらいいなという強い思いを持っています。私たちが持っている力は本当に微力なものなので、それを皆さんのお力を借りながらとか、一緒に活動させてもらうことがとっても大きいなど。多分、教育に関わる方々は、登山の頂上のゴールというの是一緒な気がしているんです。最終的に子どもたちが子どもたちらしく学べる場があること、その頂上を目指すところの登り方は様々であっていいと思っているので、いろんな登り方があって良いからみんなで頂上で出会いたいな。そのときの化学反応を皆さんと体感したいなというためのハブでありたいと思って、学園を開校しています。

なので、ヒミツキチでは、入ってくる前からお伝えしているんですけど、一度入ったら、そこに絶対いなきゃいけないという概念をそもそもなくしたいなということで、ご家庭にも伝えています。あくまでも目指しているゴールは、その子自身が学びやすい環境、その子自身に合った環境に常にいることなので、私たちは、「いってらっしゃい」と「おかえり」をととても大事にしたいなと。なので、実際にやっぱり公立校にどっぷり浸かりたいんだと言って、葉山小学校に行った子もいます、途中で。僕は海の世界に振り切りたいと言って、旅小さんにお世話になっている子

もいます。その後もいろいろ道は変わると思うんですけど、私たちは「行ってらっしゃい」も「おかえり」も自然にできる教育の未来が見られたらいいなと思っています。

実際、私とおおちゃんももともと教員で、おおちゃんも公立校を経験していることもあって、いろんな方たちの情報をいただきながら、最大限にできることを今も探しています。

ヒミツキチでは、私がみっちゃんと呼ばれているので、嫌でなければ、それで呼んでいただけたらと思うんですが、うねりのスタートとして、PLAYFULが運営しているヒミツキチ森学園の理事をさせていただきながら、藤沢にあります湘南ホクレア学園の理事も同時に行っています。あと、逗子にあるFRASCOの監事兼アドバイザーをさせていただいて、昨年度、オルタナティブスクールジャパンという全国のオルタナティブスクールがそれぞれが点々の活動するのではなくて、オルタナティブスクールジャパンを通じて、オルタナティブ同士との関わりを全国的に広げていきたいということで、その活動もスタートしました。

学園自体は、スクールリーダーをしてきているおおちゃん、グループリーダーをしてきているちゃきがメインでいますが、そのほかにも、クラスリーダーとか、スクールサポーターとか、子どもサポーターとか、旅小さんと同じように、いろんな大人たちと出会っていく場も大切にしています。

実際に、ヒミツキチの子たちが、公立の理科の実験にとっても憧れていたときがあって、そのときはお願いをして、葉山の校長先生に来ていただいて、出張授業をお願いしたりしていました。

オルタナティブスクールとして運用しているので、公立校、在籍校の皆さんにご挨拶をさせていただきながら、公立校の現状も少しは理解をしているつもりなので、なるべく無駄な手間は増やしたくないということをもットーに私たちも動かせていただいています。それでも、日々欠けてしまうところとかはあるので、それはもう少し風通しよくご相談できたらと思っています。

学園については、この後、おおちゃんから詳細を伝えていただきます。

青 山 氏) スクールリーダー、学園長をしている青山といいます。おおちゃんと呼んでください。

うちの学園の1日の流れなんですけれど、日本の学習指導要領にもしっかりと則っていきたいと思っているので、国語、算数、理科、社会をしっかりと学んでいます。ただ、特徴的なのが、午前中に自分自身のペースで進んでいく個別学習というもの、先生や仲間と一緒に学ぶ共同学習というのを、子どもたちが行ったり来たりするような、そんな学び方をしています。これによって、一人だとモチベーションが保てなかったりする子も、仲間と学ぶことの楽しさとか、そういうのに引っ張られながら、また個別の学習に入っていくということを大事にしています。また、

午後は、主に探究の学習をしていて、イベントプロジェクトというものとラーニングプロジェクトというものがあるんですけど、こういった学びを午前中とも行き来させながら、また学んでいっています。さっき旅小さんでも、プロジェクトのことから始まってというのがあったんですけど、うちでも、チャドクガが大量発生してしまって、子どもたちもかなりやられてしまって、初めて「自分たちにとって困る生き物があるんだ」ということに気づいた子もいました。そこから何か食べる、食べられるの関係を、食物連鎖で、もう一度、午前中に学んでいったりとか、そんなふうに行ったり来たりする「往還」を、二つ生み出して学び続けています。

午後の時間は、ラーニングプロジェクトというものとイベントプロジェクトがあります。何か分かりやすいのでいうと、イベントプロジェクトは、行事を自分たちでつくるということを大切にしています。今ですと、修学旅行を5、6年生が計画をしていて、予算から、行く場所から、どこの宿に泊まるかとか、何をするかとか、全部子どもたちで考えています。当然、考えていくと、予算が足りないこともあるし、けんかすることもあるし、いろんなことが起きるんですけど、でも、そうやって悩んで悩んで対話しながら決まった先で見る修学旅行というのは、僕もかなり感動して、子どもたちも何か帰りの電車やバスで誰も寝ないという不思議なことが起きる。「自分たちでつくる」って本当に大事なんだなというのを感じている毎日です。

左側が、ラーニングプロジェクトとあって、小学校でいうところの総合的な学習の時間になっています。これは、葉山町100周年のときに、音楽祭に出させていたでいて、町長と共にレコーディングさせていただいたり、子どもたちがバックコーラスに入ったりとか、そういう大きなプロジェクトもあれば、今、ちょうど僕は1、2、3年生の担任をしながらなんですけど、今やっているプロジェクトは、生き物のことについて、いろいろと学園の周りの生き物というのが巡っているんじゃないかという問いを基に、子どもたちがじっくり考え続けてきた3か月間のプロジェクトだったんです。

生き物を飼いたいからスタートしたこのプロジェクトは、チャドクガが発生した後から、絶滅しそうな命だったり、余っている命だったら、僕らは飼っていくことができるんじゃないかという思いで、葉山町のメダカの会の皆さんに話を聞いたりだとか、そういういろんな活動をしていったんですけど、いろいろやっていって、彼女（スライドの写真）がやりたかったのが、植物。庭の植物が本当にすてきで、その図鑑を作りたいとなって、今、3年生なんですけど、この子が昨日の振り返りで「それまでは、植物って風景で見えていたんですけど、でも、図鑑を作って、自分たちが知っていったら、一つ一つの命、一つ一つ命として見られるようになった」というふうに話していて、こうやってメダカの会の方に来ていただいて、ハヤマメダカって、そういうのがあって、町役場に見に行ったりとか、まちづくり協会に見

に行ったりだとか、実際に花の木公園にもいる姿を見たりだとか、そういったことを学んだり、自分たちでもそういったメダカがどこにいるのかということ、森戸川の源流ですね、源流のほうに行ったりもしながら探しました。

一つのことに対して、旅小さんとかと一緒に、僕らもすごく会話をして、相手の言葉の奥にある感情とか気持ちみたいなものを聞き合っ、そういったことが多くのことを学ばせてくれるんじゃないかというふうに思っています。

いろいろと今言った対話とか、共に作ることとか、振り返ることとか、そういったことを、僕らはすごく大事にしている、1から3年生は、森にじっくり入って過ごす時間や海で体を動かしたり、心が動いたりする時間も大事にしながら、今、26人の子どもたちと過ごしています。

野瀬氏) 今、いろいろお話をさせていただきましたが、中尾さんもおっしゃっていましたが、それぞれのスクールだからできることの役割ってあるなと思っていて、私たちも、これ、少人数で小規模だからこそできることであったりとか、実際に公教育の先生たちともたくさんお話をさせていただく中で、可能だったらやりたいよとか、うちの学校でもやりたいよという声はすごく聞くんですけど、私たちがそこですごく思うのが、全てが同じスタイルに統一することが必要なのではなく、それぞれの学校スタイルが持つ役割を潰し合わずに輝かせ合えたら、彼らも自然と自分たちの選びたいところに行くのかなというのと、ヒミツキチでもう一つ大切にしているのが、よく子どものため、子どもが中心の学校ですねと言われるんですけど、決してそうではなくて、大人も子どもも一人の人間であることを大切にしたいなと。子どもだからとか、大人だからとかではなくて、私たちも日々私を筆頭に成長が必要な人間なので、大人も学びの機会にしたいなというふうに思っています。

子どもたちも、昨年度、初めて教育委員会の場所をお借りして、校舎が小さいので、卒業式を迎えさせていただくことができ、彼らも肌で感じていました。葉山って、みんな近いんだねと。町長がいらしていただいたときも、こんなに普通に近くで話せるんだねというのを肌で感じながら、日々、生活を葉山で温かく送らせていただいています。

これからも町なかでいろんなことがあると思うんですけども、そのときは気軽に声をかけてもらって、悪いことをしていたら注意をさせていただいて、身近に感じていただけたらと思っています。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

町長) ありがとうございました。

それでは、2校の皆さんにご説明いただきました。改めてお礼を申し上げます。まず意見交換になりますので、ぜひ、よろしく願います。

それでは、委員の皆さんからご意見やご質問等ございましたら、よろしく願います。

清水委員) 今回どうもありがとうございました。

多様な学びのために、必要な学校を自らつくってくださって、ありがたいと思っています。

たくさん質問したいことがあります、まず、学校をつくるというのは非常に困難なことだと思います。今の学校の現状、公教育の現状があるからつくってみたということが前提にあると思うんですけども、その大きなきっかけ、原動力を教えてくださいましたらと思います。

中尾氏) 失礼します。

私は幼稚園を先にやっていて、いつかは思っていましたけど、具体的にはあんまり動いてはいなかったんですが、大きなきっかけはコロナです。本当にコロナで日本中の学校が閉まるようになったときに、これを、うちの卒業生たちは、幼稚園の卒業生たち、どうするんだと言って、みんなに連絡したら、どうしようとなっていたので、コロナが何者かも分からなかった時代ですが、何となく勝手に外なら大丈夫だろうというところで、うちの強みでもあるので、私がやっていた幼稚園の卒業生たちなら大丈夫だろうと思って、徐々に、通常の海岸にとにかく毎日いるから、来れば見るよというのを始めて、それが雨が降ったらお休みでみたいなカメハメ葉山というのを始めて、そうしたら、お昼を作るよと言ってくれる人が出てきて、じゃあ、お昼も出してくれるよとなって、毎日、毎日、毎日、毎日見るわと言ったら、来る子が来る子がどんどん増えてきて、何も用意していないんですけど、毎日、工夫して遊びがもう展開して行って、あっという間に四、五時間過ぎちゃうので、これでいいんじゃないかなとちょっと思っていたところ、学校が始まるよとなって、これ、またずっと座るのかとちょっと思っちゃったりとかして、それはそれで大切な学びもあるんだけど、何となく子どもが集まるだけで工夫して生まれるこの力というのを発揮できる場所が基にならないかなというのをまた考え出しちゃって、それで始めました。

野瀬氏) 私、もともと高校の教員をしていて、そのときに、子どもたちから出るのがいつも「小学校の頃は」とか、「小学校がこうだったら」というフレーズがすごく多かったのと、親御さんと面談をしていく中でもすごく大きくて、やっぱりそこで感じていたのが、高校生ぐらいになると自我が確立して、ちょっと出来上がっている状態だと、なかなかそこからの軌道修正が難しく、卒業後も何度もリターンしてくる子たちが多かったんです。実際に、私も、今、小学校3年生と6年生の子どもがいるんですけど、我が子ができたときをきっかけに、改めてまた考えるようになって、最終的に勢いのスイッチを押したのは、教え子の死でした。自分から自らの人生を断ったことを知ったときに、どうして人が人を否定し合う世の中なんだろう、なぜ、その人自身が優先されない、その人が自分が好きと思える状況の世界だったら、こんなことは起こらないんだけど、どうしても人の目が気になる、誰かに否定

されてしまうというのを感じるのがやっぱり嫌だなというのが強くて、この小学校という1年生から6年生の幼児期から小学校期に入って、六感を全て使ってきた幼児期から、今度はそれに追加して社会に出ていくための学びをする、この大事な6年間を大切にしたいと、小学校を創りました。

清水委員) どうもありがとうございます。

町長) ありがとうございます。
ほかにいかがでしょうか。

下位委員) じゃあ、私がお先に。

町長) はい、どうぞ。

下位委員) ありがとうございます。下位と申します。よろしく願いいたします。

最初に、大黒先生、課長が示していただいた教育委員会が作った資料をご覧になったかと思うんですけど、あの資料と皆さんが作っていただいた資料の柔らかさの違いが大分あるなと思いつつ、ただ、こちらは、何でしょう、公教育なので、ああいう固さも必要な部分があるので、これはご理解いただきたいなと思います。

今お話を伺っていて一番いいなと思ったのが、旅する小学校の「自分たちで決めます」というフレーズだったんですけど、今、葉山の小中学校も自分たちで考えて行動していこうという教育目標にしている学校が多いんですね。実際は、あまり考える機会を与えられていなくて、もちろん、授業の中とか、総合的な学習の時間の中では、もちろん子どもたちは考えているんですけども、あくまでも学校の時間割があって、そのルールに従って歩いていかなきゃいけない。中学生になると、受験もあるし、定期テストもあるし。割と、今、保護者の圧力が強いと、私も保護者なんですけれども、とっていて、うちの子はいい大学を出たいから、小学校から塾に行かせますというのが多いと思います。そういう人たちが社会に出たときというか、すごくいい大学を出たときに、結局は自分で考えられなくて、会社に入ったのに、人から指示をされないと何もできない。指示があるとすごくいい働きはするんですよ。そういう子ども、子どもと言っているのか分からないんですけども、新社会人が増えている現状って、教育の悪さなんだろうなと思って。

そういったところからも、みんなで話し合っ、小学生たちが話し合った結果がいい方向かどうかはまた別の話なんだろうけど、そこは問題じゃないじゃないです。話し合っ、結論をみんなで共通して出したことを、じゃあ、みんなでやってみようということが大事だと思うので、そういったところは、ちょっと学んでいかせていただいて、葉山の小学校でもチャレンジしていきたいなと思います。

あと、私も生まれも育ちも葉山なので、ずっと海で遊んで育ってきました。そのときには、もう教えてくれる大人がそのときはあまりいなかったもので、小学生の頃は、中学校の先輩のお兄さんとか、小学校上級生のお兄さん、こっちは飛び込んで大丈夫だけど、こっちに飛び込むと死ぬぞとか、いろいろ教えてもらっていたん

ですね。そういう方が今いらっしやらないという現状かと思えます。

なので、逆に、葉山小学校の先生が35人連れて海に全員飛び込ませることはできないので、そういったところは、やっぱり皆さんのメリットというか、やりやすいところになるのかなと思えますので、そういったものをどんどん進めていただきたいと思いますし。

ヒミツキチ森学園さん、26名のお子さんがいらっしやるというのを伺いました。この26名の方、大体、葉山の方なんですか。それとも、ほかの地域の方もいらっしやるのですか。。

野瀬氏) 半分以上は移住されてきた方ですかね。

下位委員) じゃあ、葉山に住んでいらっしやるからこそ通えるということですかね。

野瀬氏) 葉山か逗子、横須賀で、当時、コロナの後から全く物件がなくて、それこそ、皆さん、取りあえず入学を決めて、ワンルームアパートに家族4人で仮住まいをして家を探すみたいの方がすご多かったですね。

下位委員) 一つだけ皆さんに伺いたいんですけれども、今回、オルタナティブスクールをやっていたら、例えば、不登校の子どもたちが葉山小学校には通えない、でも、そちらに行けるといふ子がいらっしやるじゃないですか。その違いって、何なんですかね。よく僕なんか聞くのは、やっぱり集団の中で生活ができないとか、35人子どもがいる中に自分が一人で入っていけないとかと聞くんですけども、お話を聞くと、皆さんのところも決して少人数、少人数ではありますけどもすごく少人数ではないので、やっぱり集団といえば集団じゃないですか。そこは、どう子どもたちにとって違うのかなというところを、もしよろしかったら。

中尾氏) その子にもよるのかな。やっぱりうちでも集団と思っちゃって、来られない人もいますし。

高橋氏) 何言ってもいいという信頼感が子どもたちにあるから、そこかなという。

中尾氏) 大人も1票あると言われるんですよ、同等に。

下位委員) なるほど。

中尾氏) 大人も却下されるんです。そこが対等というところが、学校の先生がどうかではないけれど、言うことを聞かされないみたいな感じはあります。でも、言いますよ、すごい私も後ろで。だから、子ども同士はやりあっても全然いいし。

青山氏) 僕も少し不登校だった時期があって、教員とか、横浜市の教員を15年していたんですけど、14年目のときに初めて不登校を出してしまって、ちょっと、それが僕の中では、こういうところ、こういう場所をつくりたいと思ったきっかけの一つではあるんです。

ヒミツキチができてから3年目ぐらいに、放課後、5時まで残っていいので、その時間の中で、うちの学園は不登校のための場所というわけではないんですけど、不登校だった子が当時編入でたくさんいたので、ちょっと不登校の座談会をやりま

すと言い出したんですね。誰か集まってとかって、何か楽しそうに集まってきて、僕も不登校だったので、入れてもらって、話を聞いていたら、僕は担任の先生が苦手だったんです。すごい怒る人だったので、自分が怒られていなくても怒られている気持ちになっちゃったので、すごいいい先生だったんですけど、そういうことが嫌いだと思ったんですけど、その場にいた子はみんな基本的に友達が嫌いとか、人が嫌いとかじゃ全くなくて、ただ、ちょっと集団の圧迫感とか、何か空間から来る圧迫感とか、そういったものがほんの少しだけ苦手なんだよね。だから、すごい周りもいい人だし、いい場所だと分かっているんだけど、どうしても通えないところがあってさというのが、そのとき話をしています。

でも、「絶対に私が住む町から出ない」と言っていた子が、3年生から6年生まで過ごしたら、私は誰もいないところに行きたいと言って、今、長野の私立に通っているんですけど。最近、昨日、おととい戻ってきて、ちょっと、今度、私は海外も考えていると言っていて、何かそういう変化というのは起こり得るんだな、その子に合った場所であれば、どこであっても、その子に合った場所がきっとあると。今もそういう変化が生まれるためにはどうしたらいいかを考えています。

野瀬氏) その子は藤沢のマンモス校から転校してきたんですけど、やっぱり卒業前に何がそんな違ったんだろうねと言ったら、彼女は、自分の思いがすごく強い子で、けどシャイなので、出すタイミングがなかなか見つからないから、それが出せないのがもやもやしちゃったのも大きかったのかと言って、少人数のところに来たけど、進路を決めるとき、私、やっぱり大人数でチャレンジするとなったし。もう一人の公立校が苦手だと言って転校してきた子も、卒業時に、中学校の進路を決めるに当たって、何も知らないから、取りあえず、全部、公立校も私立校も気になる、オルタナティブも全部見た上で、結果、行きたい私立校を選んでいたんですよ。でも、そのときに、そんなことは考えたくはないけど、落ちたら公立もありだと自分では思っている。あのときの当時の気持ちが全くなかったというのを聞いたときに、やっぱり何か彼らのタイミングで、そのときのタイミングでたまたまその場に合っていないだけ。だから、多分、イメージとしたら、公立が合わないというよりも、ただ、自分の地区のその場所の空気が合っていなかったというだけで、彼らから出て面白かった言葉が、俺らが行けなくなったことで、先生が責任とかを感じている人がたまにいるんだけど、本当に気にしないでほしいんだよねと、何か逆に困っちゃうんだよねと言っている子たちもいたから、改めて、いろんな場所が最初からあったら、何かどこも自分たちを否定することなく行けるのかな、先生も含めて。

下位委員) 大人もなんですね。

野瀬氏) はい。

中尾氏) 矛盾しているかもしれない。私は幼稚園を先にやっていて、どこに行っても大丈夫な子にと思って、幼稚園をずっとやってきて、みんな公立に行って、葉山のいろ

いろみんなお世話になっていて、もちろん理不尽なことに遭ったりとかすると、言いに来たりもして、だけど、別にそれを何をするわけでもなく。「うんうん」と聞いていて、また帰っていくというのはやれているのに、何で学校をつくるのって、やっぱり子どもにも聞かれましたし、どこに行ってもよくしてくれたんでしようと言われたし、今、ちょうどアメリカに行っちゃった、今、大学生になる子が、幼稚園に戻ってきて手伝ってくれているんですけど。だから、何かそうやって帰ってくる場所でありたいなというところもつくったのに、また学校をつくるというのは矛盾しているとやっぱり言われましたけど、さっき、ヒミツキチさんもおっしゃっていましたが、みんなタイミングがいろいろあるから、一概に一つの原因だけで、あれが悪かったから、こうなっちゃっただけじゃない。思春期もあるし、家庭の環境もあるし、いろんなものがあると思うんですよ。

だから、これも、一人ずつ見てあげられれば、みんな対処法が何かしらあるんじゃないかなとは思っておりますけど。

下位委員) あるんですね。

何か小学校に入ると、要は、同調圧力みたいなのはどうしてもあるじゃないですか。

中尾氏) そうみたいですね。

下位委員) クラスにいなきゃいけないとか、私も、PTA会長時代に小学校の入学式で話をしたことがあるんですけど。幼稚園から上がってきた皆さん、今日からチャイムが鳴ります。チャイムが鳴ったら教室に入って座らなきゃいけないんですという話をしたことがあるんですけど、それがいけなかったのかな。今思うと。

今の日本の集団教育というか、チャイムが鳴ったら、みんな教室に入って座って授業を受けるというのが、いいか、悪いかはちょっとここでは議論できないんですけども、そういった時代じゃないのかなという気がしますね、今の発表で。

中尾氏) タイミング、本当に集まるよと言っても来ない子がいて、いつまでも漫画を読んでいて、友達が呼びに行っても、あと2ページを読み終わったら来るといったら、本当に来る場合もあるし、でも、それを待てるかどうかだけな子もいれば、それが長いし、だから、一概には本当に言えないけれど、ちょっとやってみて思ったのは、小学校の時間、時期って、思っているより、やっぱり子どもの心はまだまだ柔らかいから、さっきの同調圧力とか、そういうものによる影響もすごく強かったり、そういう時代だから、12歳まで何かいい環境でいれば、あとは大丈夫じゃないかなと思えたのは、みんな、1、2年生は旅中をつくって、旅中をつくってと言うんですよ、この先、公立の中学に行くから、旅中をつくっておいてとみんな言うんだけど、結局、6年生までいた子たちは、もう大丈夫だから要らないと言ってきて、自分の力を試したくなったりとかして出ていって、私立受験した子もいるし、そのまま公立に行った子もいるし、行って、またいろんなこと言うてくるんですよ。体育の

時間は気をつけと休みしかしなかったとか、何かいろいろ言うんだけど、でも、それに一々とらわれず、もっと先の面白いことを見つけたりとかできているから、12歳までの柔らかい時期をしっかり受け止めてあげれば、何か子どもたちの力ってすごいなというのは改めてやってみて思ったところではあります。

野瀬氏) その卒業前は、明日からまた来ちゃうとか言いながら、寂しいと言って、まあ、来ないんですよ。自分の学校が忙しいとか、委員会だとか、新しい友達だとか、でも、何か寂しいけど、すごい私たちは喜ばしいことで、うちが中学校をつくらない理由もそこなんですけど、温かい場所にずっといることが必要なんじゃないくて、やっぱり生きる力にそれぞれがつなげていかなきゃいけないので。寂しいけどね。ただ、帰ってきたいときとか、何かちょっと息を抜きたい実家に帰るぐらいの気持ちで帰ってくる時はありますけど、それぞれが巣立って、いろんなところへ、公立に行っています。

青山氏) 合わなかったで止まっていたものが、自分で合わせられるようになったりとか、もっと奥のよさが見えたりだとか、いろんなことが育っていくなという。

下位委員) ありがとうございます。

以上です。

町長) ありがとうございます。

ほかはいかがでしょう。

では、お願いいたします。

小峰委員) 小峰と申します。よろしくお願いいたします。

二つの学校・学園のお話を聞いて、さっき、どなたかが言っていたという、公立の学校でもできるならやってみたい、そういう気持ちはとてもよく分かりました。子どもたちに、本当の意味で生きる活動が自由に与えられるならやってみたいと、公立学校の先生、ほとんどが思っていると思います。とてもいい実践が生まれる理由は、先ほど清水委員が質問した中で、お二人の方から、学校をつくったいきさつを伺って、まず、設立した方がパワフルだから、子どもたちを受け入れられるんだなということも感じました。

ヒミツキチでお書きになった言葉も使わせていただくのですが、「誰もがみんな同じ頂上を目指している」とお書きになっているのですが、同じ頂上って、どういうことを考えていらっしゃるのですか。

野瀬氏) 私たちとしては、教育の未来にある頂上は、子どもたちがそれぞれ自分に合った場所に来ること、自分たちに合った学びを受けることだと思っています。

小峰委員) それは公立の学校でもどこでも、今、教育をするという学校というか、教育をする者にとっての目指すところは、子どもたちの学びに合ったものをつかめるということだということを考えているということでしょうか。

野瀬氏) 子どもたちに合った学びの場所に出会うこと。

小峰委員) 出会うことは、それは、教育界全体がそういうふうを目指しているはずだというふうにお思いになっているということですか。

野瀬氏) じゃなくて、そういう頂上を目指したいなという思いでやっています。

小峰委員) 私が、同じ頂上というのを読み違えていたのかもしれませんが、教育者というのは、みんな同じ頂上を目指していて、そこに行くための道筋はいろいろとあって、そちらの学校のような目指し方もあるんだろうし、公立学校がやっているようなやり方で目指している、いわゆる公的な学校が目指しているところも同じだよということで、お書きになったのかなというふうに読んでしまったんですけども、そういうことではなくて、今、そちらで考えているのは、子どもたちに合った教育ということですか。

野瀬氏) というよりも、教育に関わる人の全員の思いを聞いたことがあるわけではないので、そこが絶対だよとは言えないのが確かなところだと思っています。ただ、私も、教員をやってきたりとか、教員のみなどと話していく中で、いつも話に出るのが、彼らに合った場所がたくさんこうやって増えていくことがいいよねというところで、これを書かせてもらっています。

小峰委員) ということは、ごめんなさい、繰り返ししつこく聞いて。ということは、多分、教育する者にとって、目指すところはみんな同じその子に合ったところにたどり着いてほしいなという気持ちは、教員というか、指導する者にとっては、同じ思いだろうという、そういう意味で。

野瀬氏) はい。あってほしいと思っています。

小峰委員) 分かりました。

続けてよろしいですか。

先ほどもお話しいただきましたが、そちらの学園、学校が終わった後は、中学校へ進まれているわけですが、それを選ぶのは、皆さんが勧めていた自ら選べるという、そういう教育をしていると、子どもたち自身が選べるのか、あるいは、保護者の方も、その子どもに合った道を選ぶ意識が高くて、当たり前のようにスムーズに、うちの子にとっては、私立がいいよ、地域の公立がいいよ、あるいは、また別なオルタナティブあるいはフリースクールの中学校に行くのがいいよということになるのでしょうか。卒業してからの進路をどうやって選んでいく子たち、あるいは、家庭が多いのか、教えていただけたらと思います。

中尾氏) 自分で決めるということを大事にすることをとことんうちはやっているんで、それを尊重した形で、保護者も一緒に考えてくれるという形です。だから、親の、何だろう、思いを本当はここまで出ているけど、まず、子どもの意見を聞いてからというところにすごく頑張ってくれている保護者が多いです。あとは、何だろう。

高橋氏) 何か選択肢を知らない、選べないので、小学校6年生に自分で決めるをやっている、中学校のことは知らないことが多いので、ここは、割と保護者の方が協力

して、こういうところもあるらしいよというのは、親子でたくさん話し合いをして決めている家庭が多いです。でも、何だろう、子どもたちは、お母さんがここに行ったほうがいいのかから行くというのは、本当に聞かないので、あくまでそれは選択肢として、お母さん、お父さんが受け取って、でも、決めるのは自分というので、みんな決めていると思います。

小峰委員) 卒園生を、まだこちらは出していないのですか。

中尾氏) うち、最初から6年生がいて、全学年そろっちゃって、ずっとやってきていたんで、毎年、卒業生を出しています。

小峰委員) 具体的に言うと、どういう学校を選んだお子さんがいらっしゃるのですか。

中尾氏) 公立に普通に行く子が一番多くて、私立と、さっきの映像にもあった離島留学をすって、親元を離れて、離島の全寮制のところに行くと言った女の子もいたり。

小峰委員) ヒミツキチさんのほうは。いかがですか。

青山氏) そうですね。うちも、子どもたちが基本的には選ぶ等を自分でやっています。何か夏休みの自由研究で、いろんな学校に行って、自分で感じたことをまとめて比較してみたりとか、そういう子が出るぐらい、何か自分で選ぶというのはすごい大事にしているなと思うんですけど。でも、葛藤はあるなと思っていて、親も、やっぱり葛藤しているし、子どもも悩んでいます。でも、最後の最後で、自分たちで選んで、去年なんかは6年生が4人いたんですけど、4人とも、結構、个性的で、でも、その個性を潰さないように4人で仲よく調和していたんです。それだけ仲が良かったので、誰か同じところに行くかなと思っていたんですけど、でも、やっぱり最後は自分で選んで、4人とも違う場所を選んでいて、それが決まったときの子どもの表情とかを見ていると、選び抜いたんだなと思うのは感じていて、そうやって、最後まで選ぶというのは大事にしています。

うちは、多分、私立、公立、オルタナティブの中学って、大体、同じぐらい、ちょっとだけ私立が多いかなというぐらいの割合で今のところ決まっていますね。8名ですね。

小峰委員) すごく長く質問してしまって、ごめんなさい。ありがとうございました。

町長) ありがとうございました。

鈴木委員) もっと無礼講っぽく聞かなきゃいけないよね。僕は教員じゃないものだから、分かるところ、分からないところもあるけど、正直言って、目からうろこという感じで。こういうことに、やっぱり支えていただいているというのはすごく大事なことで、まず感じたのと、やっぱり画一的な教育というのは、もうかなり限界、もうかなり前から限界があるんだ、あったんだろうと思うんですけど、そういう物の考え方では、もう学校というのは成立しないんじゃないかなというふうに、今、お聞きしていると非常に思いました。

それから、学校に来られない、学校に来ない子を、我々は勝手に不登校という言い方をしていますよね。これは絶対間違いだなと今思って聞いていたんですよ。登校はされているわけですよね。ただ、うちの学校が選ばれていないだけのことなので、不登校とは言えないんじゃないかなというのをちょっと感じたのが一つですね。

それから、もう一つは、やっぱり両校の先生みたいに、やっぱり、うちの教師も懐の深い先生がたくさんいるんだから、僕はそれを信じて、そういう教師も見ているから、いや、かなり懐を深く捉えているんだろうなと思って、かなり許容範囲を上げて、懐を深くしないと、どうも今のうちの教員たちは注意してしまうんじゃないかなと。それがやっぱりいつも難しい。さっき、下位委員もおっしゃっていたので、それが駄目だと言ってしまえば、僕ら、教育委員は全滅みたいな感じになっちゃうんですけど、駄目じゃないんですけど、やっぱり、もう、私、ちょうど24年生まれの戦後生まれなんですけど、ここから来ていた義務教育ということは、日本の義務教育というのは、すばらしいシステムだと思っているんですね。これは、やっぱり、在り方としては、今、お聞きしている限り、いろんなパターンがあるので、それぞれからいろいろ僕はお聞きしたりありますけど、やはり今の教育の在り方というのを変えていかないと、我々から言うと、大変失礼な言い方の不登校というのが増えてしまうだけで、内容を見ると、不登校とはちょっと言えないなという感じがするんです。

大体、僕が不登校のアンケートを取ると、気力がないとか、行きたくないと。ところが、そちらさんに行っている方は、みんな行く気満々だという、ちょっとある方はフリースクールの方で、文科のやつ6割ぐらいがそういう理由なんです。それを勝手におまえたちが決めている理由だというような気がしているんですね。そうじゃなくて、やっぱり本当はちゃんと自分が行きたいと思えば行くんだから、今聞いていると、不登校とか、気力がないとかということで、文科や、我々、教育委員会が考えてしまうのは、あまり合っていないなというのを非常に感じたので、今日は、非常に勉強になりましたという感じがしました。ありがとうございます。

中尾氏) 先生たちに自由がないから、先生が苦しうだから、子どもも苦しくなっちゃうのはあるなと思っていて、私、幼稚園のほうは、最初に就職した幼稚園で大きい幼稚園のコンサルとかもやっけていても、やっぱり保護者からのクレームに構える先生たちが子どもに何かを言うという不適切な言葉とか、自由がないから、愛はあるのに使っちゃいけない言葉があったりとか、愛のほう伝わってなくて、先生たちが苦しい中でやると、子どもも楽しいわけないなというのをすごく思っていて、ヒミツキチさんは分からないけど、私たちは、大人も子どもと同じ1票を持っている分、対等で自由でいるし、だから、子どもとけんかもしますし、私。多分、動画を撮られたら、炎上しちゃうようなけんかもします。だけど、それが許されていて、うちの保護者の方たちはそれを許してくれていてというところで、やっぱり先生た

ちが苦しくかわいそうに、かわいそうと言ったら失礼ですけど、に見えたりします。だから、先生たちは思いがある先生がいっぱいいるから、お会いして話したとき、立ち話で3時間みたいなところもあるし、やっぱり、すごい、でも、僕は公立で頑張りたいんですとすごいおっしゃっていたし、だから、先生の自由を何かできないかなとは。

野瀬氏) あと、どうしても、何だろうな、さっきもお伝えしたんですけど、否定のエネルギーから生み出したくなくて、例えば、不登校というワードが出たときに、公教育の先生たちが何か自分たちに責任があるんじゃないかと思われると思うんですけど、何度もお伝えしているように、その子に合った学びの場が増えれば、不登校というワード自体がなくなるかもしれないし、誰も、大人であっても、子どもであっても、自分を否定しなくなるんじゃないかなというのが一つあって、現に、私の子ども二人は公立校を自分たちで選んで通っているんです。お互いの情報交換もするし、私も知らない世界なので、PTA役員をやってみようと思って、何なら3年前落とされたんですけど。

青山氏) ブラックリストに載っているの。

野瀬氏) なんですけど、思いはあるから、一緒に公立の先生の力になりたいと思って入ったときに、私が感じたのは、自分も含めて、親への課題でした。とにかく子どもが自分で選択をした道を選べないのは、もちろん教育システムもこれから進化が必要だと思うんですけど、親も進化しなきゃいけないなど。例えば、私、我が子の家庭科のボランティアに行ったときに、野菜いれたいから、タマネギとニンジンとピーマンを持ってきてと言われたんですよ。そうしたら、ジップロックに入ったカット野菜、もうお母さんが切ってくれたやつを持ってきている子が何人かいたんですよ。そのときに、先生がえっとなっていて、お母さんが時間が足りないと思ってと言って、えっ、調理実習なのという疑問と、あとは、やっぱり、日々、お母さんたちと話をしていく中で、そこでも否定が生まれて、何かあれば、何か文句を言っているんだけど、それは本当にその子自身が困っているの、お母さんが心配なだけじゃないのというのがすごくもどかしいのもあって、ヒミツキチ森学園をハブにしながら、一般の親向けにも、今、オンライン茶話会というのを開催していて、私たちが言うと、角が立つので、うちに在籍する親たちが、直接、親の視点から伝えてもらう。本当に小さな活動ですけど、学校がこうやって教育総合会議が開かれているように、親も親として進化していく必要があるんじゃないかなというのを、自戒の念も込めて、やりたいなとは思っています。

町長) すごく重要ですね。

鈴木委員) そうですね。先ほど言われたように、ご家庭への対応が教師が苦手で、特に若い人は、教師の資格を取る人は結構、皆さん真面目に勉強されて、私みたいに裏社会を通過してきたわけじゃないので、どうもそういうところが対人関係が弱いというか、

説得ができないところがあって。私、ちょっと、私も教育委員会を長くやっているんですけど、ちょうど真ん中ぐらいのときに、各学校でちょっと問題があったときに、教育委員会に戻せと。要するに、あんまりいつまでも学校で対応しているのではなくて、一、二回対応して、なかなかご理解いただけないという場合に、担当教師がそこまで行ったら、もう潰れてしまうんですよ。実際、具合が悪くなった方もいらっしゃるの、実は、本当に、私、そういうトラブルが大好きで、町長さんも得意だと思いうんですけれど。結局、三、四人に、学校、その子は4か月で、今言った3人は別の学校、別でしたけども、同じ学校じゃない。誰一人私に会いたいという人はいないんです。当時、私、教育委員長で、当時、委員長である私が、一番、教育長よりもえらかった時代、そんなことを言っちゃいけないですね。それで、私がいいますよと言ったって、誰一人親御さんが来ないんすよね。

僕は、そのときに、僕の流れとして、若い先生に言ったのは、要は、向こうが言っているのは、むちゃくちゃを言っていると親御さんは分かっているんじゃないかと。だから、私がお会いと言っても、私に来ないのかなという話をしたら、当時の教育部長が、おまえさんの写真見て怖がって来なかったんだと言われましたけども。だから、そこら辺の対応が、どこでという部分がなかなか今の教員、若い人は慣れていないということがあって、だから、今のお二人の学校で、ご父兄との間も結構順調、きちっとできている、お互いに言い合うところもあるんでしょうけど、学校の教育、そこまでやれといっても、なかなかできないんでしょうけども、すぐパワハラだ、セクハラだ、何とかハラだという話になるんですけど、怒っても注意され、何か指摘されると、パワハラだと。かといって、怒らなきゃ、よしよしというわけにはいかないということで、やっぱり教員の判断が、もうちょっと、我々、教育委員会が、ここまではきちっと言っているとか、ここまでは考慮して、それで駄目なら、教育委員会が制御するからというような一つのルールづくりみたいなものをつくっておかないと、やっぱり家庭の対応は、一番、教師が苦手とするところなんじゃないかなと。そう思ったんですけど。

そこは、私は、常に教育委員会のところで言っているんですけど、私の声がでかいせいか、みんな嫌がって乗ってこないところもあるんですけど、それも一つの教育委員会の在り方として、今後、必要なんじゃないかなというふうに、今、お聞きして思ったんですけど、ありがとうございました。

野瀬氏) 確かに、うちも役割を変えています。クラスに立つ大人は、もうとにかく子どもと一緒に向き合ってほしいので、要は、うちの親、保護者たちによくお伝えするのが、環境をつくった上でですけど、子どもが育つ上でも、四の五のうるさいというのと、伝書バトはやめてくださいと、いつもそれを言うんですけど、逆に、やっぱり子どもたちと向き合う時間と、彼らも人間として向き合っている時間なので、親が心配なことは、逆に、今度は全部こっちがもらっていて、ここに1回かみ砕いた

やつをまた全体で話をしたりというのはあるので、やはり現場の先生たちが全て子どもも大人も請け負っていたら、難しいんじゃないかなというふうに思います。

鈴木委員) 大変ですよ。本当は、僕も分けてあげたほうがいいなとはちょっと思っている部分があって、1回絡まっちゃうと、一、二回で解決しなきゃ解決しないんですよ。だから、それは別のセクションで別の人間が間に入ることによって、少しずつ向こうのほうも考えが変わってくるんじゃないかなということを期待している部分もあるんですけど、やっぱり、葉山の教員、いろいろ同じように見えていますけど、決して雑な教員ではなくて、かなり優秀な方がたくさんいますので、今、教育長なんか公立で、さっき下位委員が言ったように、探究的なものをかなり要求して、そういう方向でやっているのと、専担方式にどんどん切り替えてきていますので、いい結果が出てくるだろうと思っはいるんですけど、ですから、専担方式にすると、学校全体、要するに、1年は1年の担任全員が一つのグループみたいな形でやってくれる仲間たちがおります。そういうふうにしていくことによって、何かトラブルったときは、全体的に把握して、やってもらえるときが来るんじゃないかなと思っはいるんですけど。

僕は、自分が出ていくのを楽しみにしているんですけど、私が出ていくと、町長が会ったときに、えらい町民から怒られるとかで、むちゃくちゃになってしまう可能性があるんで、多分、私に何も言ってこないんじゃないかと思っはいるんですけど。ですから、今日お話を聞いて、参考になったかなというふうに思います。

ありがとうございました。

中尾氏) サイレントマジョリティーという言葉があるように、何か賛同する人の声は出ない、反対する人の声が聞こえてきちゃうというものもあるから、なるべく子どもたちにも、何か落とし物が今日もありましたみたいなことばかり言う会に、1回、うちもなっちゃったんですよ。誰かがよく見つけてくれたねみたいになっちゃったもんだから、毎回毎回、帰りのとはぼタイムという何をしゃべってもいい時間に、こんなところに落とし物がありましたみたいな、何か鬼の首を取ったみたいな時間になっちゃったときに、それで楽しいのかなというような投げかけをして、前は違ったよねとほかの子が言ってくれて、前は、こんなことをやる仲間を募りたいですか、こういうことがよかったと思っよという声を出す会だったのに、いつからそうなっちゃったのみたいなので、流れを変えるというのはやっています、大人も員として。

だから、子どもも、やっぱり、そういうふうにされるから、きつとなっちゃう、子どもの、誰かのあらを探すじゃないけど、別にそんな責めはしないけど、何かそういうことじゃない、いいことをもっと声に出そうみたいなほうが世の中の流れも変わったらもっといいのになと思っはいるので、子どもたちからやろうと思っは。

鈴木委員) 僕の小学校にもそういうのがあったよ。

青 山 氏) 何か本当に問題を解決するというよりかは、自分たちが願っていることをどうつくっていくかなと思って、僕は、教員のときと今とあまり感覚が変わらなくて、教員のときも、何か出過ぎていたら、くいは打たれないんだなと分かっていたので、いろんなことをやらせてもらっていたんですけど、でも、本当に、何だろう、今もPTA会長を娘の学校でやったりとかもしているんですけど、さっき葉山小の先生、去年、研究講師で入らせていただいたときも、本当に研修の場が終わっても、ずっと探究のことを話している先生だったので、本当にすてきだなと思っていて、うちの学園にも、公立小学校のようにこの時間の中でここまで引き上げてくれたら伸びるのになという子は確かにいて、だから、本当にいろんな場所が、さっきグラデーションという話があったんですけど、いろんな場所があって、そういう場に子どもたちが選んでいる状態になっていくと、多分、今のうちの娘みたいに、さっきみっちゃんも言っていたんですが、私の娘みたいに、今の公立の場所が本当に合っている、うちの娘はほんと大好きで、そういう子もたくさんいると思うので、一つ一つが理解してもらって、いろいろ混ざってくると、もっともっというろんなことに専念できて、オールマイティーにいろんな人がやらなくていいなというふうに思っているんですよ。

鈴木委員) ありがとうございます。

小峰委員) もう一つ。質問させて下さい。

町 長) はい、どうぞ。

小峰委員) ヒミツキチさんのほうで、小学校の指導要領もいろんなカリキュラムをつくるときの参考にしているというか、一部取り入れているというお話なんですけど、いわゆる、教科書などを使って学習されているのでしょうか。小学校の指導要領も参考にする根拠というか、お考えはどのようなところにありますか。

青 山 氏) 僕も、指導要領のことをいろいろやってきたりして、本当に優れているものだなという認識が僕らの中ではあったので、オランダのイエナプランという教育も大事だと思っているんですけど、それをそのままやるんじゃなくて、日本に合ったものというふうに思っているんで、取り入れているというよりかは、結構、多分8割ぐらい、9割ぐらいカバーしているかなというふうに思っています。ただ、やり方をいろいろ変えていて、跳び箱とか、僕らは器具がないですし、あれは、たくさんの子が、何だろう、体を支える力をつけるためには優秀な方法だと思うんですけど、大人になって僕らは跳び箱しないじゃないですか、誰も。だから、これは、何かの山に登って、木で丸太に登ったり、木登りしたりとか、そういうふうに行って、いろんなことをしたりとか、そういうので代わりになるなというものを含めて何かやっています。

中学校に行ったときにも、どれぐらい苦労するのかなというのが分からなかったもので、一応、卒業生に「何が中学に行って困った？」と聞いたんですけど、「家庭

科の玉留めもスピードがみんな速いとか、あとは、何かやってないのも確かにちょっとあったりしたけど、その辺は自分たちで何とか学べるし、学び直せるしというのは自信がついているから、そんなに気にならないかな」というのは話していたので、でも、何か取り入れるというよりか、結果はできるようになっています。

小峰委員) T e l a c o y a さんも、小学校の指導要領というのは、取り入れていらっしゃるんですか。

中尾氏) 取り入れていません。ただ、5年たって、やれていることもあるというのは思っていて、だから、ちょっと検証したいなと思っているんですけど、5年終わったときに、これまででどれぐらいカバーできていないんだろうということは知りたいなと思っているんですけど、肌感だと、60%ぐらいはカバーしているなとは思っているので、それをきちんと出せるように、5年終わったらやろうと言っていたんですけど。

小峰委員) いわゆる普通の公立で、公教育的な学校でやっている教科指導みたいなものは、どういうものを参考にして取り入れているんですか。

中尾氏) 絶対やっているのは、文字と数字というところで、足し算、引き算、割り算、掛け算はできるようにするというのと、あと、文字が書けるように、あと、伝えられるようにというところはやっていますけれども、「あ」という字を10回書くとか、そういうやり方では全くやっていないので、逆に、何でそれが書けるんだろうというすごい難しい漢字を書いたり、行った場所の地名だったりすると、そういう形でやっているの、のっとはやっていないです、全く。

小峰委員) というのは、それは、子どもたちが何か興味を持って、本を読めば、文字を覚えるとか、あるいは、さっきほどのお話にあった、理科的なものとか、社会的なものというのは、自然の生活の中で自分たちが調べたいと思ったもので、それを探究していき。そのときに先生たちがサポートするという形で、いわゆる、そこに教科的な学習をやっていくということでしょうか。

中尾氏) 例えば、今、参院選があるので、参院選の授業をやって、どんな政党があるのかとか、この地区ではどんな人が立候補しているのかとか、その政党が掲げている税に対してどういう違いをみんなが言っているのかとか、そういうのを調べて書いたりとか、そのときに、じゃあ、何とか税、何とか税って何だろうとなったら、今度、税について調べていくとか、そういう形の進め方です。

小峰委員) 学年は関係なくやっているんですか。それに興味が持てそうだったら、4、5、6年ならできそうだなとか、あるいは、この中でそういうことに興味がありそうな子については、一緒に学ぶとかというようにやっているわけですね。

中尾氏) そうですね。はい。

高橋氏) 何か学年で必ず分けたいということもでもないもので、例えば、2年生でも、俺、そっちに入りたいんだけどとなったら入るし、5年生でも、俺はやらなくて、こっ

ちをやりたいんだとなったら、それもできるしというので、意見を聞きながらやっています。

小峰委員) 分かりました。ありがとうございました。

教育長) お二人とも、ありがとうございました。もともとむちゃ振りに来ていただいて、ありがとうございます。

そもそもの、ようやくと文部科学省も不登校の数がそこまで行ったからなんですかね。文科省そもそものが、学校の対応に任せてきたというのは、高等学校の中での定時制の子たちとの関わりだったり、特別支援学校の子たちとの関わりだったり、通信制に行っている子たちとの関わりだったり、当然、最優秀の神奈川県トップの高校の子たちとの関わりだったりしたときに、そもそもの多様化なんですけど、でも、小学校の義務段階のところで多様化を文科が認めてこなかったというところにそもそも問題点があって、公的なところではやり切れなかった。で、行く場所を設定できなかった。その中で、たまたまお二つの学校のように、オルタナティブスクールをつくろうというふうに立ち上がった人たちが全国にちょうどでき始めたというのが、一定時期から突然でき始めたんですよね。それまではそういうものをつくろうという人たちというのはちょっといたけれども、それはばーんと広がらなかったんですね。

教育の多様化の中で、最近、ちょっと考えているのが、葉山の中でも、総合計画の中でも、ウェルビーイングという言葉を使うようになって、これは行政的にも相当使うようになっていきます。ウェルビーイングって、基本的に単なる幸せという意味ではないんですけど、幸せという物の考え方というのが、これはウェルビーイングの研究している人たちの中のところで明確に言われていることなんですけど、かつての幸せって、いわゆる物理的な消費的な価値観におけるところの幸せが中心だったんですよ。なので、非常に刹那的だった。だから、その場で何かが自分の手に入るとか、そういうものがすごく、どこかに行って、ただ単に面白くというのがすごく幸せという感覚でしかなかったんですけど、これは、社会変革の中で、成熟社会になっていく日本の経過の中で、それはあまり幸せではないと気がつき始めたわけですよ。

より持続的で精神的に豊かな、簡単に言うと、快樂というものを追求していくほうが本当は幸せなんじゃないのという方向性に日本が変わりつつある中で、子どもたちは、いわゆる、かつての小学校の義務教育の中でしか楽しいことは存在していなかったはずなんです、かつては。ところが、いろんなものが、楽しいことが社会の中にあふれてきているし、充足する消費的なものはとくに手に入るようになってしまったんですよ。学校に行っても、別にあんまり楽しくないことって、たくさん、多分、言葉にしないけど、いっぱいあって、教室の中の、例えば、35人学級なら35人の机があって、座っているということに対して、それに喜びを感じる時代もかつ

てはあったはずなんです。でも、今は、そうではなくなった。社会変革の中で、どうしていけばいいのというところの中で、子どもたちなので、自己表現ができないので、身体状況に出るような子たちが続々と出始めたというのが、恐らく、かつては登校拒否という、ある一定のところ、文科省が不登校という概念に変えてしまったわけですが、それが今でもどんどん増え続けていくというのは、もう簡単に言うと、社会変革と、それから、人間の中のところの喜びの追求実態が全く変わってしまって、これはもう大人が、先ほど中尾さんがおっしゃったけど、大人がそう思っているから、子どもに伝播するに決まっているという、そういう状況の中でそれが増えていっているという状況ですね。

そういう中で、これは、イギリスの哲学者さんが、まだ生きておられる哲学者で、ケイト・ソパーさんという方がいらっしゃって、この方がオルタナティブヘドニズムという言葉を出しているんです。オルタナティブというのは、オルタナティブスクールと同じオルタナティブです。簡単に言うと、「代替」という意味ですよ。「別の」という意味です。ヘドニズムは「快楽的」という意味です。ですので、根本的に言うと、物の消費から体験創造関係性の価値転換がされてきているというのが、今現在の、近代ではなくて、現代というところの部分で、非常に大きくて、その中で様々なことをやろうということ、ようやく日本の教育界でも気がつき始めて、さらに、文科も、そこはきちんとした教育機関だというふうに認め始めたということがようやく出てきたんだろうなと思っています。

冒頭で申し上げた、僕が、例えば、通信制に来ているお子さんたちと一番初めに会ったのは、平成の20年近辺のところ、もう普通高校に入り切れない人たちが、みんな、山ほど、通信制が初めてできたときになだれ込んできて、神奈川県全体の中で、簡単に非常によくない言い方をすれば、普通高校に君は合格ができないからここに行きなさい、私学に行きたいけれどお金がないでしょうと言われた家庭のお子さんたちが、私が最初にできたばかりの通信制の横浜修悠館高校というところの管理職だったので、野瀬さんが働いていた学校も近いところはあるんだけど、規模的には非常に大きくて、いわゆる、活動生と言われている単位取得の意思を明確にしている履修生が2,800名いたんです。なので、そういう子たちって、どう思われてきたかという、簡単に言うと、社会的には非常に日陰者的に扱われてきた、もっと言うならば、それは定時制にいる子たちも同じです。

かつては、定時制というのは、ご承知のとおりで、昭和23年に日本が敗戦した結果として、学校というものが明確になったときに、アメリカの意向でつくられたのが定時制です。しっかりと働きながら学問を学べるところの高校をつくりなさいというアメリカの意向でできたのが事実。そういう子たちがたくさん全国にいたのも事実だけでも、これも、ご承知のとおりで、もう今や定時制に通っている子たちで、仕方がなく働きながら定時制に行っている子たちはほぼいません。

じゃあ、それで、翻って考えていってみると、不登校になった小学生の子たち、中学生の子たちというところの増加と、それから、もともとの学校の中でのいろいろな形で、先ほどは日陰者という、これの言葉がいいかどうかは別として、もっとひどい言い方をするのが普通なんでしょうけども、そういう子たちとの連動性というのは非常に幾つかあるんです。でも、ようやく、今は、普通にオルタナティブに通っている子たち、フリースクールに通っている子たち、それから、学校じゃないかもしれないけれども、居場所に、普通にどこかに居場所がある子たちというのによりやく日が当たってきて、その子たちのいわゆる幸せということを世の中で考えようという、ようやくなり始めたんだなというふうに思っているんです。

なので、葉山は、できれば、私、こちらに来させていただいた結構早い時期から、皆さんとはいろいろな話をさせていただいているんですけども、これから先もというよりは、今までもなんでしょうけれども、葉山にある教育機関として、連帯をやっぱりしていかなきゃいけないし、例えば、学習指導要領の話が云々かんぬんの話がありましたけれども、大分前の段階から、いわゆる、G I G A端末は、どうぞ、使う方は持って行ってくださいねという話をしています。今、G I G A端末の中には、A Iのドリルが入っていますので、仮に、本人たちが自ら気がついて、何らかの学習を始めようとするならば、G I G A端末のところで、学習指導要領にのっとったドリルは幾らでもできるので、子どもたちには、やりたい子たちがいれば、やってみたらというところは、これは、公立のレベルから、オルタナティブに対して、フリースクールの子たちに対しては、当たり前ですけど、税金で賄っておりますから、これは貸与するのは当たり前だと思っていますので、もっともっと使ってください。

今日、午前中に教育委員会議でもお話をしましたが、この前、校長会議で話をしたんですけども、G I G A端末の中には、グーグルのワークスペースが入っています。A Iの関係で、G e m i n iというのがグーグルは動いています。グーグルのG e m i n iと、それから、N o t e b o o k L MというA I系のものを、両方もワークスペースで動かせるように8月から子どもたちもなります。全くお金はかかりません。なので、どんどんこれから、もしかして、オルタナティブの中でも、子どもたちも、先生たちも、どれだけでもいろんなものを使えるんだろうなと思っています。子どもたちへの開放は8月頃からと思っていますが、学校に対しても、当たり前のことですが、A Iというものは野放図にさせると様々な問題が起きますので、できればというか、恐らく非常に単純なご認識としては、先生たちが立会いの下で使ってねという形にしようと思っていますので、開放のときにまたお知らせをしようと思います。非常に優秀です。町長も最近そうですから、この作業、ほとんど、最近、A Iを根本的に仕事の相棒にしていますので、それぐらいのことというのできる状況にありますので、ぜひ、子どもたちにもそれを使ってもらえるよ

うな形というのをやってみてください。

残念ながら、先生方のところのアカウントは、現在、有していないので、子どもたちのアカウントを使っただけであれば、幾らでも何でもできると思いますので、それはそれで、Wi-Fiにつないで、いろんなところやっただけだと、ありがたかなと思っています。

すみません。長くなりました。最後に、物の考え方で、別にこれがいいかどうかは分かりませんが、イェナプランだったり、北欧系の考え方、それから、欧米系の教育の考え方、いろんなことがありますけれど、私が高校の校長だったときによく子どもたちにも話をし、それから、根本的には、このステップは非常にいいなと思っているものがあって、何かというと、アメリカのスタンフォード大というのがあります。スタンフォード大のd. schoolで考えて、きちっとした形で物の考え方が整理された物の考え方がデザイン思考というのがあります。デザイン思考の物の考え方は、やっぱり理にかなっていて、一つは、何かというと、問題の定義から始まって、アイデア創出をし、その後に、プロトタイプで様々なものを作って、そこをさらにプロトタイプをユーザーと共にしっかりと考えるテストがあって、最終的には、それに対して、ユーザーに対するニーズや感情であったり、行動を深く理解するための共感というものを、繰り返し繰り返しやっていく中で、子どもたちの、あるいは、ここはスタンフォードであれば、大学生になりますが、物の考え方をより進化させる一つの物の考え方として、非常にいいものだろうというふうに思っています。

この中で、先ほど冒頭で、旅小のところで話が中尾さんから出た、一つ、教育におけるおける部分で大きな物の考え方は信じることと待つことなんですけど、この二つはデザイン思考の中に確実に入っているんですよ。これは、子どもたちに全てやらす、つまり、大学生は自分たちで研究するためのプロットになるわけですけども、当たり前のように、小学生であったとしても、信じることと待つことというのは、似たようなんですけど、実は違って、それを教育者として、これは公立の先生たちにもぜひ考えていただきたいと思っていますけども、待つことの意義、信じることの意義というものがどれだけ子どもたちを成長させるかということ。それから、一番の、さっきの5項目の中で、やっぱりプロトタイプのところですね、いかに仮想のものを作らせて失敗していくかという、このものがすごく重要だと思っています。両校のところでやらせているところの多くは、多分、デザイン思考のステップに非常に近いものを作ってられるんだと思っています。

通常の小学校、中学校では、なかなかそこまで進めないところはあると思いますが、でも、できるだけ教科面ではやれることがたくさんあると思いますので、今後、様々、勉強させていただいて、いいところは、お互いのところで吸収できればなというふうに思っています。

今日は本当にありがとうございました。

町 長) よろしいですか。

私のほうから幾つか質問したいことがあって、今、稲垣さんがお話ししていたような、今の子どもたちを取り巻く環境、私たちの暮らしもそうなんですけども、経済が大きく変化してきて、今、第4次産業革命なんて言われている時代、今日、私、昼、ニュースを見ていたら、孫正義さんが、ソフトバンクが、今、AIの5,000億ですか、投資して会社をつくって、AIエージェントをそれぞれにつけられるように整備していこうという発表をしていた。1人で1,000人ぐらいのプログラムを持てるような、1,000個ぐらいのプログラムを持てるような、そんな仕事の仕方をしていきますと。グーグルも、Amazonでしたか、すみません、人員削減を発表しましたし、AIに置き換わるからと。子どもたちが、将来、我々が、申し訳ないです、多分、年金をもらうような、僕はぎりぎり働いていると思いますが。その頃に、この第4次産業革命の影響が思い切り現れてくるんだろうなというふうに感じています。

私、振り返ると、10年間の第3次産業革命と言われていた携帯電話が出て、OA化が進んで、パソコンも1人1台持たれるような、この時代を見てきたんですけども、多分、その時代に僕らが何も変わるものを見なかったことの反動が、今来ていて、僕は大学で授業をしていると感じるんですけど、生徒たちの、学生さんの個の世界をすごくしっかり持っていて。山本海人、今日も事務局としていらっしゃるんですけど、彼に授業してもらってよかったのが、僕たちがマイクで学生に「皆さん、どうですか」と、しーん、「どこから来ましたか、手を挙げてください」、しーん、なんですけど、彼は、QRコードを示して、「はい、答えてください」というと、「スマホで答えてください」というと、撮り出して、全員答えていました。回答率100%なんですわね。

いや、本当にこの10年間、15年ぐらいかもしれないけども、スマホが浸透して、ここで自分の満足感を得ている。自分の世界を持っている子たちの象徴的なこととしても話をしました。これが、この後10年、15年、AIとともにどういう時代をつくっていくか、想像がつかないところが最大の悩みでして、そうなりながら、今、196億円かけて、この場所に、葉山小学校をつくる。向こうを裏庭にしようと。そこには、葉山中学校と一色小学校を一緒にしようという話を進めなきゃいけないので、どんな教室で、どんな学びがそこにあるんだろうかというのは、もう分かると思いますけど、全く答えがないんです、今。

そこで、最近、私がつ、これがキーワードとして拾わなければいけない仕事なので、いろんなことを精査して、一つ、キーワードで、これかなと思っているのは、皆さんと全く一緒だと思いますけれども、主体性ですね。人としての主体性というのは、絶対的なものだなというのがよく分かってきました。そこに行き着くための

学びのというか、人間としての生きる、そして、どんな社会事象があつて、どんな社会像があるかも、これからの民主主義が参議院選挙で大きくぶれていますが、これは当然の流れだと思つていて、これからどんどんそれが大きくなってきてというふうに思うと、ここで私たちがどういう、葉山だけでも、私たちは葉山でしか動けないので、だけど、気持ちで動きたい。それが一つ大きな学校というところに表せるチャンスだとも思つてはいます。

そこで、皆さんにぜひ伺いたいということがあります。まずは、ちょっと細かいことになります。教員でいらっしゃるのが、高橋さんは、幼稚園、保育園ですか。

高橋氏) 幼稚園と保育園、保育士も免許を持っているので。

町長) メインはそっち側ですね。

そうしたら、教員のお二人には、先生たちのワーク・ライフ・バランスや先生の働く人としての学びについて、何かもつとこうあるべきじゃないかというご意見があれば伺いたいなど。先生たちはワーク・ライフ・バランスを進めていて、学校の部活の外部化をしていて、働きやすくしている、町費教員もいっぱい入れて、支援級のサポートもいっぱいしているんですけども、葉山は問題ないと思つていますが、一方で、官報を見てみると、もう毎日毎日、教員の免許剥奪、免許取上げなんていうのもいっぱいあつて、ちょっとその名前を検索すると、いっぱい出てきますね、そういった問題が。昔からかという、最近、ちょっとひどいんじゃないかと思うと、教員さんにどういうふうに私たちがこれから向き合っていけばいいのかというところを、私は知りたいと思つていますので、ぜひ、そこをお教えいただきたいと思つています。

お二人、高橋さん、中尾さんにお伺いしたいのは、さっきお話があつたんですけど親教育なんです。ご存じのアマヤドリさんですね。今、18歳以上にも、我々、児童福祉の枠を越えて、福祉を広げなければいけないんじゃないかと思うように、私自身もそうですけど、この中で、多分、おじいちゃん、おばあちゃんからというのはあつたかもしれませんが、一般的に、親として学ばせてもらう、学びを自分から得る以外に、親はこういうものだというものを学んできたというカリキュラムは多分ないと思うんですね。それこそ、大きなお世話なんだろうけども。でも、そこにも福祉として踏み込まなければいけないんじゃないかと最近心配をしていて、私が唯一のチャンスだと思つているのが、妊産婦健診の際に、子どもとはこういう弱いものであり、こう育てると、こうなるもんだという一定のものを、役所が強引にまとめなきゃいけないんじゃないかというふうに心配をしています。

生まれてしまうと、自分の自我が芽生えるので、なかなか難しいんですけど、生まれる前のそのチャンスに行政から何かアタックできないかなというふうに考えていますけど、非常に難しい問題でして、親教育、どんなアプローチがあるか、ぜひ教えていただけたらと思つています。

最後にもう一点、4人の方にお聞きしたいのは、こうして、今、オルタナティブとして教育に関わられている皆さんが、いろいろなものを包含して結構なんですけど、期待していること、子どもたちに、教育に、これからの未来に期待していることを、ぜひ、一つずつ伺いたいんですけども。

最後をお願いします。先ほど冒頭申し上げたように、これからの学校づくりに、ぜひ関わっていただきたい。196億円は、学校の教育委員会の中で、既存の考え方で、既存のものの延長線で考えたものなんですけども、恐らく既存ではないものがこれから大きく必要になります。そこには、ぜひ、皆さんの、今、私がさせていただいた質問のようなことを、学校の柱のところにも入れていかないといけないことがたくさんあると思うので、ぜひ、ご協力いただきたいなど。

一旦、方針は出したんですけども、もう1年間、かけさせてくれというふうに教育委員会のほうで話をしております。一年間様々な議論を経て、町の新しい学校の在り方を、形を見せて設計に入っていきたいと思っていますので、ぜひ協力をお願いしたいと先にお伝えします。

それでは、2点になりますけども、どなたからでも結構ですのでお願いします。

野瀬氏) ワーク・ライフ・バランスですね。

町長) 教員の在り方についてですかね。

野瀬氏) もう全てにつながるんですけど、やっぱり人の心を大切にしたいなというのが第一で、いろんな事件とかトラブルとかが起こると、やっぱり、いつも頭に浮かぶのは、この先、人の心って、どうなっちゃうんだろう。AIが発達してきて、子どもたちが文字のやり取りがメインになってくる中で、要は、相手の気持ちを酌み取る力も減っていくだろうし、こういうことがあったときに、例えば、何かトラブルがあった、でも、必ずみんな自分の主張から始まると思うんですけど、一步視点を改めて、この人の裏側には何かあるんだろうというのを感じたときに、一気に空気が変わるんですね。というのも、私たちの学園でも、朝、必ずサークルをしてから、みんなの状態を見てからスタートするんですけど、まあ、朝からいらいらした顔だちの子とかがいるんですよ。こうやってサークルになると全員の顔が見えるので、その瞬間に、何かあったんだろうなど。そのときに、例えば、私たち大人もそうですけど、いらいらしたとか疲れているときって、全力が出せるわけではないので、何かそれを相手の背景に何かあったんだろうなって、グループリーダーが感じた上で、授業に臨むことで、何かあったときでも、また違う視点が見えるなどというのもあったりして、そのためには、こっちの大人も余裕がないと駄目だなと思っているんです。

私自身も高校の教員ときは、自分の時給換算をしてみたんですよ。そしたら、最低賃金と言われるマクドナルドより低くて、時給が493円だったんです。というぐらい、もう24時間体制で働いていましたし、高校生を対象にしているので、夜中

だろうが何だろうが連絡が来るし、どんどん心はすり減るんですけど、どうやら持ち前の気力だけでそこは成り立っていた。でも、自分がそういう場をつくるときって、子どもたちに一番身近につながる大人、先生の立場の人が、その人自身が人生を楽しんでいないと、子どもに人生を楽しみなさいと言っても、楽しめないだろうなと思ったので、自分たちがつくった法人なので、自分たちのやりたいようにできるという特権を使って、うちは週1のリモートを取ってもらっています。

意味としては二つあって、週5日間あるとして、月曜日から金曜日に子どもたちが通ってくるんですけど、週5日間を丸々、例えば、担任が子どもたちといることで生まれるデメリットもあるかと思っていて。変な意識に駆られるんですよ。この子たちは自分が守らなきゃとか、この子たちは何とかしなきゃと思うんですけど、私も教員をやった上で感じるのが、すごくおこがましい考えだなと。もうその時点で上から子どもを見ているなという感覚があったので、子どもたちもそうですけど、例えば、恋人間、夫婦間、家族間もそうだと思うんですけど、毎日一緒にいると慣れてくるし、ちょっと離れたいときもあるし、それを生かしてみようかなというので、週1回、リモート日を取ってもらったんです。ただ、リモート日なので、子どもたちからヘルプがあったときは、オンラインでつながるようにはなってくれているし、それ以外は、自分も人生がもう少し輝くような研鑽だったりとか、逆に、旅に出てもいいと思うんです。日帰りの旅に出てもいいと思うし、要は、それこそ、最先端の力を使って、オンラインでつながる場所なら。どうしても山に籠もって、電波がないところに行きたいときは、もう事前に言ってもらって、今日はちょっと電波がつながりにくいですと言ってもらうんですけど。

そうすることで、やっぱり生まれたのが彼らの主体性だったんですよ。私は、逆に、学園は彼らにお任せしているので、大人要員として、その日はいるんです。でも、そうすると、彼がつくってきてくれたクラスなので、朝、勝手にサークルが始まって、午前中の授業が始まって、休み時間があってとあって、また必要なときだけ声をかけられるんです。何か、今、大人が必要みたいだからみたいなことで。なったときに、やっぱりずっと一緒にいることが大切なんじゃなくて、それぞれの立ち位置で、それぞれのうまいあんばいを使いながら、自分たちの時間を生み出していくのはとても大事なことです。

何かそのほうが子どもたちも意外とそういう空気感のことをやっているのでも、その中の水曜日、水曜日を取ってもらっていたんですけど、さぼるかなと思っていたんです、イメージとして。要は、グループリーダーがいるときはちゃんとやるけど、いないときはどうなのかなと思っていて、私もちょっとよこしまな気持ちで、いないしと思って、今日、ちょっとブロックアワーを削って、天気いいし、ピクニックに行っちゃわないと、ちょっと早めて、お昼休みを長めに取って行っちゃわないと言ったら、私、子どもたちから非難を浴びたんですよ。「えっ、今日」と言われて、

「いや、そうだよ。今日、水曜、あおちゃんいないし、行こうよ」と言ったら、彼ら、1週間の学びの計画を自分たちでそれぞれ立てているんですけど、そういうのは早く言ってもらわないと困るんだよね。要は、水曜日が削られるということは、木曜日に自分たちの課題を回さなきゃいけないし、せめて週の前に言えないかとか、すごく怒られて、行きたいなら一人で行ってもらってもいいよみたいなことを言われたので、じゃあ、おとなしくいようかなとなつたときに、やっぱり見張られているとか、大人が見ているからという環境じゃなくて、彼らがやっていくスタイルをつくるためにも、時たまいない日というのを定期的につくるのが大事なのかな。

たまに先生が出張とかだと、私も、小学生時代、先生が出張と聞いて、あめ玉を持って行って怒られたことがあるんですけど、何かちょっとばれないことをやってみようかなと思う、違う気持ちになると思うんです。定期的にいらないことでのクラス運営も、彼らの力があるのでされていく実感はあります。だから、まずは、自分の人生を楽しんでほしいと思うのと。

私自身が、我が子の学校に個人面談で行ったときに、必ずご家庭から何かありますかと質問を受けるんですけど、最後に、「先生、人生楽しいですか」と聞くんですけど、いまだかつて誰もすぐ即答してもらえていなくて、でも、それもやっぱりいろんな要素があると思っていて、お忙しいのはもちろんかもしれないけど、そこで、「お母さん、はい、楽しいです」と言ったら、何かあったときに、あの先生、自分の人生楽しんでいて、うちの子ほったらかしなのよという親もいるから言えないのかなとか、いろいろ思ってみたりしているので、最終的には、先生が人生を楽しんでいると胸張って言える教育の場がやっぱりベストなんじゃないかなという気はしています。

やってみてどう。

青 山 氏) ありがとうございます。

何か僕もしんどいと思う時期もあるし、何だろう、鬱病とかまではならないんですけど、そういう教員のときも、去年もちょっとしんどい、心がしんどいと思う時期は正直あるなと思っています、いろんなことに葛藤もするので。何か頭で考える思考と心で感じる感情と体でつかむ感覚の何か三つの領域がいつもバランスがいいといいなと思っていて、僕は、AIって、ロボットのほうだと思っていて、結構、みんなも、もしかしたら、ちょっと数年前は感覚の部分を補佐してくれるものとあったんですけど、もう実際入ってきてみると、思考じゃないですか。すごい思考を持っていて、そういったものが代わりにできるようになってくる。そうになってくると、やっぱり残りの二つのところ、体の感覚と心の感情がものすごく大事なんだなというのを、最近、すごく感じています。

だから、時間的に余裕があるからとか、余裕がないから多忙なんじゃなくて、多忙をどう感じているかということが何かすごく大きいんだらうなというふうに思っ

ていて、リモートをもらって、明日もちょっと別の学校に行くんですけど、やっぱり別の学校、いつもじゃない場所に行くと、あ、これって、うちの学校だったらと思ったりとか、体の感覚も少し旅に出ている感じもあって、ちょっと開く感じもあって、そういうふうになってくると、時間的には結構きつきつなんですけど、すごい感情がリフレッシュしていたりとか、新たな刺激をもらって、また前を向けたりだとか、何か実際にそういうことって、すごく起きるなというふうに思っています。

教育に役立つだろうと思って始めていないことが結構あって、例えば、僕は、アキレス腱を断裂したことがあって、柔らかくするためにヨガをやってみたら、物すごい自分の中で気持ちよくて、もう10年ぐらい毎朝続けているんですけど、それが今キッズヨガの授業を公立でやらせてもらったりとか、学園でもキッズヨガの資格を取ってやっていたりとか、何げなく始めたウクレレが、ただ自分が楽しいから、でも、ギターは弾けないから始めていたウクレレが、今は、音楽の授業に成り立っていたりだとか、何かやってみたいや楽しいというものを、利害なく始めたことが、理屈は何かちょっとよく分からないし、実際、時間的には無駄な労力かなと最初は思うんですけど、理屈なく始めて、心が動いたものですよ、多分、体の感覚が。そういったものが何か巡り巡って、今、役に立っているなとかというのをすごく感じて。自分は、もうちょっと先生たちの体のこととか心の部分とか、そういったことに目を向けると、多忙感みたいなものや自分の感じている忙しさの感覚とか、今思っていることとか、どういう状態であるというのがより働いて、何か仕事の中のバランスって取れていくんじゃないかなという、実際に、こういう働き方をしてみても、ずっと思っています。

町 長) ありがとうございます。

教員にリモートなんて絶対ないと思いましたが、やっぺらっしやるんですね。

野 瀬 氏) すごく画期的です。本当にお勧めです、多分。

町 長) ありがとうございます。

では、先ほどのお二人、よろしいでしょうか。親に向けて、親教育ですね。

中 尾 氏) 私のところは、幼稚園も、小学校も、この子どもを挟んで共に手を取り合う仲間ですというのをずっと言ってきたいて、サービスする側とされる側じゃありませんというのを理解して入ってくださいというのを必ず言っているの、真ん中に子どもがいるから、その子のためにどうしたらいいかねと考える仲間としてはやれるんだけど、さっき町長がおっしゃっていた親になる前の人にといいところで、やれることも確かにあると思っていて、今、ちょっとほかのところでも私も子育て支援のあれを、授業とかをいろいろ持たせてもらっている中で、やっぱり大人になっちゃっているから、大人の感覚なんですよ。全然しゃべれない子に「順番よ」と言って、「ママ」、「パパ」、「ワンワン」、「順番」みたいな、それしかしゃべれないのに「順番」は言えたりとか。でも、「順番」の意味が分かっていない。なのに、そ

れを言われて、何か順番は駄目ってことみたいな覚え方をさせちゃっているのが、やっぱり若いお母さんたちとかには気になるところなんだけど、一方で、私の卒業生も、やっぱり小学校も、高校も、大学も、真面目に全部宿題もちゃんとやって、トップで出てきた子で、就職したら、何も教えてくれなくて、自分で考えろと言われてた。どういうことと言われたときに、それは教育が悪うございましたと謝っちゃいましたけど。何かやっぱりそのバランスが、今が厳しい時期かなとは思っている。

だから、親も、今、じゃあ、教育のゴールは何を求めているんですかと聞きたいんですね。今までのようないい大学、いい就職というのを目指すなら、うちみたいな学校に入れたら、無理ですよ。だけど、そう望んでいない人が入ってきてくれる、うちの保護者はね。でも、いいところも行くんじゃないかという期待もしてくれている。だから、ゴールの目指し方が、今、親御さんたちが迷い始めているんじゃないかなと。大学受験も変わってくるでしょうし。うちにちょっと大学の教授の人がいて、その人ももう全く変わってくるよというのをすごく言ってくれている。じゃあ、そうなったときに、さっき言った、何を基に学校をつくったらいいのか。何を信じて、何をといったときに、この間、ちょっと東大の勉強会に行ったら、10年後を想像できる人は誰もいませんと言われて、じゃあ、なおさら、何をとなっていくと思うので、学校が何を求められるのかとかに沿った親の教育をしないと。

それでいうと、関係なく振り切っている親御さんは、もう勉強なんかいいですと、この子が自分で決めた道を、ジャングルでも何でも行けば、もう何でも応援するというぐらい振り切っている人と、そうじゃない人と比べたら、まだまだ振り切っている人が少ない。けど、こっちが増えていかないと、きっとこの先分からないから、どれがいいかが。だから、こっちを増やしていかなきゃいけないんだろうなとは思っています。親御さんの考え方。

町 長) ありがとうございます。

中 尾 氏) どうですかね。

高 橋 氏) 何か、私は正直に、何だろう、保護者の方とかに親教育というのはまだなかなか言えないというか、年齢的にもまだまだ、経験的にも言えないことはあるんですけど、その代わり、なるべく保護者の方が集まれる日をつくったりとか、体験に来たいと考えてくださる方に、在校生の保護者の方を呼んで、学校の説明とか、子どもの様子だったり話してもらったりとか、そういう場所をつくるようにはしていたんですが、まだまだですね。

町 長) ありがとうございます。

中 尾 氏) すごいいい場をつくってくれるので、うちに入りたいという親御さんが子どもと一緒に来た日に、在校生の親たちをいっぱい呼んでくれるんです。それで、親目線でこの学校のメリット、デメリットを。

町 長) いい学校ですね。

中 尾 氏) そう。話してくれて、それが長引いちゃって、ちっとも帰らないみたいぐらい、でも、それを設けてくれたランチ座談会という、子どもが作る給食を食べに来る日というのをつくってくれて、ちょうど明日なんですけど、そこの保護者を集めてくれるとか、アイデアはいっぱい出してくれるので。そこに入れ替わり、立ち替わり、うちに関わるいろんなスタッフが同席するようにはして、私のカラーが濃いので、すみません、私だけがやっているんじゃないというところをやっぱりちゃんと見てもらいたいから、いろんな人に出てもらおう。

町 長) ありがとうございます。

行政としては非常に踏み込みづらい思想的な話もありますし、いろいろあるので、いろんなパターンで考えてみて、いろんなパターンの子育ての親の目線みたいな本でも作って、好きなやつを選んでいいよ、こんな趣旨で書いてあるから、だから、好きに選んでくださいも一つありかなとか、いろいろと、これですと言っちゃうと、いろんなハレーションが起きるんですけど、やっぱり選択肢がありますよというのを、何かガイドブックとか作ったらどうなんだろうとか。赤ちゃんに向き合う「葉みんぐ」、もしものときは病院に行きましょう、こういうときはおしめを替えましょうみたいなのがあるんですけども、親がどういう気持ちで、どういうふう人間と向き合うかみたいなことがないので、親向けの教育もどこかで何とか頑張っているかなきゃいけないと思っております。

すみません。最後に1点だけ、皆さんに、学校の、子どもたちに対してもいいですし、学校のこれからに対しても、日本の将来に対しても期待していることをぜひ教えていただければ。ちょっとお時間もあるので、端的に。

どうぞ、高橋さん。

高 橋 氏) ただシンプルに子どもたち一人一人が楽しく幸せに生きてほしいなという、ただそれだけです。

町 長) ありがとうございます。

中 尾 氏) やっぱり私は人も雇ったりとか、チームをつくっていく中で、子どもも大人も適材適所だと思っているので、自分が全部マルチの点数を取れないから、チームで80点という、自分の今の考え方ですけど、会社とか組織もチームで80点出せばいいんじゃないと、みんなが優しく思えば、何かしら発揮できるものを持っているはずだから、縦じゃなくて、横になっていくんじゃないかなと思うので、そういう社会をつくる人になってほしい、今の子どもたちは、と思っています。

町 長) ありがとうございます。

青 山 氏) 移転させてもらって、近くに来させてもらって、僕は、新入生も受け持って、1、2、3年生、気づけば半分ぐらい転入生と新入生なんです。二つの言葉をすごい多く使って、一つは「どうしたらいい？」と、もう一つは「やっていい？」なんです

よ。それを聞かれることがすごい多くて、どうしたい、君はどうしたいと声をかけることがすごい多くて、「君はどうしたい」と声をかけることがすごい多くて。だから、「どうしたらいい？」が「こうしたい」になるように、僕らも本当にまだまだと思うので、それはこうしたいと思える、やりたいことが出てくるとか、自分がこうしたい、こう決めるといことがたくさんあふれるような世の中にしていききたいなと思います。

町長) ありがとうございます。

野瀬氏) 私は、シンプルに愛を持ち合った教育界でいたいなと思っています。もう幾らくさいと言われようが、きれいごとと言われようが、それぞれの形はあると思うんですけど、愛情とか、愛というものを失った時点で、すごく冷たい空気になると思うんですよ。さっき町長もおっしゃっていただけですけど、私、ヒミツキチを立ち上げる前は、教員との間に、赤ちゃんの眠り研究所というところにいまして、要は、産後、ねんねトレーニングがうまくいかなくて、産後鬱になってしまうお母さんたちのケアをしていたんですけど、やっぱり、そこも愛だったんですよ。どうしても一人では生きていけないので、もっと周りにつながる必要があって、どんどん周りにつながるという感覚を持ちにくくなっている世の中だからこそ、どんどんつながっていききたいなというのと、それが学校がハブになったらいいなと。やっぱり、みんな当たり前のように行く場所なので、必ず会うことができる。そこで、愛を感じることができたら、またそこから違うんじゃないかと思うので、本当にこの葉山の教育会議に呼ばれて、呼んでいただいて来たときに、結構感動しているんです。PTAを落とされているぐらいなので、世の中の常識というところでははじかれることもあるんですが、それに不満を持っていたときもあったんです。でも、こういうふうに話したいことをお互いが話し合わせてもらったりとか、いろんなお話が飛び交うという環境自体が、もう、今、葉山に夢と希望しかないなと感じているので、ぜひ、町長が自らあふれ出ている愛をこの町に落としていただけたらいいんじゃないかなと思っています。

引き続きよろしくお願いします。

町長) どうもありがとうございます。ありがとうございました。

驚きそうなお声がありましたけど、この皆さんのお声は、一言一句、全て議事録としてホームページに載りまして10年保存になりますので、本当にこれから学校づくりの大きな資料になります。ほかにもメンバーをたくさん入れなきゃいけないかなと思っていますので、ぜひ、今日の一つのお力添えをいただければと。どうもありがとうございました。

皆さんからほかに、何かございますでしょうか。

清水委員) 町長と教育長がいらっしゃるので、葉山町にとっても、なくてはならない存在だということは、教育長も町長もおっしゃいましたが、逆に、行政、教育行政、に対

して、何かこういう協力関係、こういうことができるんじゃないかとかあれば、教えていただきたいなと思います。こういうことをしてほしいとか。例えば、鎌倉はフリースクール補助金が出たりしますよね。それは一つとして、何かこれというのがもしあればお願いします。

教 育 長) 10年保存ですからね。

清 水 委 員) そうですね。

中 尾 氏) いや、なるほどね、自前でやっているの、何かやっぱり協力をいっぱいしたい気持ちもいっぱいありますから、葉山にあるこの学校の多様性を、何だろう、外に向かっても発信していくためには、切り離して、あちらは、こちらはではない仲間にしてくださるのかなと、今日の話でとても思っているの、何かその中で、経営は苦しいですということはいつも言っていますけれども、そこに何か、例えば、公立に行っていないくて、うちに来ている子の分のと言ったら変ですけど、その子が公立で行くべきの予算がきつとあるはずなので、そのうちの1%でも、私たちがお預かりしているという気持ちはないんですけれども、でも、大事なお子さんをどこにいても幸せでいてほしいよねという話は前にもあったと思うので、そういうところでの何か歩み寄りがあれば、ありがたいです。

公立の先生は、もし、旅小さんで難しかったら、いつでも公立に返して下さっていいですよみたいに言ってくださるんですけど、返す、返さないとかではなく、彼らが居心地のいい場所を選べばいいなと思っていて、どっちにも行かないという選択をしないでもらいたいなというふうには願っていますから、それについては、全力を尽くしてやっていきます。なので、その何かがあれば、うれしいです。

どうもうちの子はそれを言いに行っただ子がいるみたいで、どこに行っただろう。何か役場に行ってきたよと言われて、僕らが公立に行っていない分、旅小にどうにか金を回してくれと言いに行っただと聞いて、何みたいなの。

清 水 委 員) 子どもたちがですか。

中 尾 氏) 私の指図ではございません。でも、何か自分で言ってきたと言われて、びっくりしましたけど。旅小は貧乏だといつもみんなが思っているから、子どもたちが何かお金がなくても工夫すれば楽しいこともいっぱいあるし、子どもたちは夏休みをなくしてくれというぐらい学校が行きたくてしょうがないと言ってきていて、夏休みないと、こっちが死んじゃうから、勘弁してと言っているぐらいだから、そういうふうにしてもらえることが、一番、私たちもやりがいになっているし幸せだなと思っています。けど、どうか一つ。

町 長) これは、本会議で、教育長が既に。

教 育 長) この前、言っちゃいましたので、もうちょっと待ってください。

中 尾 氏) はい。期待しています。

野 瀬 氏) ヒミツキチからは、本当に学校をつくるとなったときに、一番困ったのが場所な

んですよね。こんなにも世の中は教育に冷たいのかと。子どもに冷たいのか。大人になった人たちが子どもの声がうるさいからやめてくれという声を聞きながら、でも、反面、ふと我に返ったんです。子どもだから全部許されるというのもおかしいなど。それで、ヒミツキチの子たちにも、子どもの特権を使うときと使わないときは、やっぱり人として向き合うときと違うという話は日常しているんですけど、これを機に、葉山町にもたくさんの空き地とか空き家とかが存在すると思うんですけども、それを何かいろんな事情は伺ってはいるんですけど、空き家として登録されていないとか、いろんな相続の問題があるとかというの伺ってはいるんですけど、もし可能な町として使える空き地・空き家物件があったら、オルタナティブの使える場所として教えていただけると、すごく可能性が広がるなというのが1点と。

もちろん、いろんなところでフリースクールに通うための補助金とか、いろんなお話もあるんですけど、その中でも、やっぱり私たちが持つ違和感もあって、そもそも教育に無料で行くのが当たり前と思っている思考を、私たち、親としては変えていかなきゃいけないなど。そこに国とか町とかがちゃんと予算を置いているという認識を持った上で行くと、またクレームの内容が変わるんだと思うんですよね。要は、教育というのは、私たちがこれから生きていく力を養うために、私たちがアイテムゲットできる場所でもあるという見方に変えていく必要もあると思うので、その予算のところは難しいところだなと、私たちも日々考えています。

なので、補助金が単に出れば幸せなわけでもなく、なので、私たちも価格設定をするときに、あえて高くしたんです。というのも、駆け出しだったので、まずは、学校を続けていくことが必要だったので、そこに同じ覚悟を持った人が来てくれないと、またぐちゃぐちゃのただの場になってしまうので、親御さんたちは非常に頑張ってくれたと思うんですが、でも、そこでいただいた意見、声が、今まで大学資金をためるとというのが親だと思っていた、大学に行きたい、留学をしたいというときに、ためることが必要だと思っていたけど、小学校のこの6年間に注ぎたいと思って、ためるのをやめて、うちの入学を決めましたという親御さんもいて、やっぱりそういうきっかけから思考が変わるパターンもあるなと思ったので。

うちはもうとにかく場所があったらいいなという、森とか空き家とか、やっぱりなかなか見つけるのが難しいので、ただ、本当に葉山町は温かいので、近くの葉山小学校さんはいつでも遊びにおいでとおっしゃってくださいますし、本当に学校の施設をお互い使い合えるところを使わせてくださると、ご相談にも乗ってくださると言ったり、うちの子たちも公立を知りたいと言って、忙しい中、見学に行かせてもらって、今は、週1回、公立でも授業を受けてみる。全く知らない世界、1年生からオルタナに行くから。でも、彼女は、公立の中学校、葉山中学校の進学を視野に入れているので、まずは体験したいと言ったら、本当に忙しい中、対応して、子どもたちのために尽力してくださっているの、学校の恵と葉山町の間、使える場

所があったら、ぜひ、いただけたらなと思っています。

町 長) 分かりました。ありがとうございます。

分かる範囲でお答えしたいんですけども、今、夏って、私たち、要望の活動時期なんです。国会議員とかも、通常国会が終わって、そこから参議院選まで暇になって、海外とかみんな見に行っちゃったりするんですけど、そこを捕まえて要望していくんですけど、道路とか、大きな規模の公共インフラ要望が冒頭であって、もう一個の大きいところが学校・教育についての要望を今しています。先ほど、グラフで見せていただいた不登校のグラフとか、支援の伸びとか、カウンセラーとか、そういったものをこんな形で力を入れていましてということをや要望していて、総合では、葉山町は7,100万ぐらいですか、年間でかけているという数字をお示ししているんですね。町としては、かなり金額を出しているところで、国・県はもっと細かくしてくれよというのを私たちも強く思っているんで、引っ張ってきて、何とか使えるようにということをや頑張っていきたいと思っています。

ですので、ただ、今、先立つものだとということでは、今、本当に官民の連携がすごく緩やかな時代になってきたところがありますので、何かのときに、これだけ学校を治めている皆さんなので、町の支援としてとか、町の信頼を使っていただいて、町の後援という言い方はちょっと軽いんですけど、そういうことはちゃんとありますということをや、私たちのほうから幾らでも発信はできると思いますから、そういうときにはぜひ使ってもらえたらというふうには思います。

建物の関係なんかも実は近いところがあって、おっしゃるとおり、葉山町って、実は、空き家が全然ないんです。特定空き家とかというのもなく、町のほうであって、指導すると、ごめんなさいって、すぐ壊してくれるんですよ。空き家だからという、大体、別荘だったりとか、おっしゃるとおり、相続でもめているので、すみませんみたいなところはあるんですけども、なかなか私たちも使えるところがなくて困っているのが正直なところ。空き家、空き地もそうなんです。空き地、どうぞと言われると、大体、山なんです。さっき、山と一言おっしゃいましたよね。山は、かなり使えるところがいっぱいあります。

これからも、今、ご存じか、町の5分の1を占めている大和ハウスさんの山についても、大和側と協定を結んで、今、使えるようにしていますから、その辺り、言うていただければ、私たちのほうから平場の場所は、山は用意できると思います。建物は厳しいですね。

でも、それも仮に、さっきのお話のとおり、民間でいろいろと、大人の方がちょっと私たちも保育園で苦労したので、何とも言い切れないんですけど、貸す、貸さないだけであれば、町が応援している学校法人ですとか、そういう言い方は十分できますので、それは幾らでもおっしゃっていただければ、応援させていただきたいなと思います。

それこそ、私自身が学校を今度つくる中に、そういう連携施設だったりとか、皆さん方の連携が取れるような形というのが、中に入ってもらいと、またいろいろ出てくるんですけども、何かそういうものが考えられればいいとも思っているところがありますので、それは、また教育委員会で。

教 育 長) 補助金の関係については、神奈川県全体のところも、先ほど申したとおり、国だけではなくて、神奈川県もそこに目を当て始めた。これについては、もう先ほど申したとおり、本会議でも明確に答弁をさせていただいていますので、もうすぐ制度化をするよというところまでこぎ着けているので、あとは、町長と頑張るってやるので話をするだけという中で、これは削っていない。

あとは、場所の問題とか、様々なところというのも、それこそ、町長が話をしたとおり、新しい学校ができるということは、新しい学校でない学校がそのままどうなるのかという話とイコールになってくると思うので、その辺も、どんな形で何ができるのか、官民のところでも共に使えるような施設というものが可能性は幾らでもあるものをとるところも想定はできます。そこに関して、何をしていくのかというところまでは、まだ政策的なところまで話を進めているわけではないので、これも確実にそうやっていくことが、ほかの自治体のところではやっているところがありますから、これも一つのモデルとして、葉山としては何をしたいのか、仮に行ったところで、全然違うところが平然と手を挙げて入ってこられちゃっても、また話が違うなというところもありますので、いろいろと考えていきたいと思っております。

それと、ご承知だと思いますけども、葉山ではないですが、秋谷にIB校ができるのは明確になるので、あそこでも提携をかけるということで話をしていますので、あそこの資産というものは、またそれはそれなりにみんなで使えるようにしたいというふうに、当然、社長さんもおっしゃっているので、またそうなったときには、お話を差し上げようと思っておりますので、また今後ともぜひよろしくお願いします。

中 尾 氏) 葉山町は海洋教育はどのようにお考えになっていますか。

教 育 長) 大丈夫ですか。

中 尾 氏) ごめんなさい。

教 育 長) 次があるんですけど、あとの段階でいいですか。

町 長) 『海は金がかかるんだよ。』という言葉がよくありまして・・・。

中 尾 氏) でも、ちっちゃい固まりなら、うちも請け負えるから、うちにもプロがついているし、何か少しでも海に行く教育を公立が取り入れていけたらなと。

町 長) 国こそ、多分、そういう民間の教育をつくってお願いしていくのではないでしょう。そろそろ閉めなきゃですね。

(その他)

町 長) では、その他項目、特に何かよろしいですか。

委員 全員) なし。

町 長) では、本日、次第につきましては、以上で終了させていただきます。
では、事務局のほうにお返しいたします。

(閉会宣言)

教育総務課長) それでは、ありがとうございました。

以上をもちまして、令和7年度第1回葉山町総合教育会議を終了いたします。

次回の日程は、また決まり次第、ご連絡さしあげたいと思います。

時刻は16時19分です。本日はお疲れさまでした。